



南条光のHでEROSなファンブック

HEROS

エロース

DOJIN
R18
成人向け

Lasciate ogne speranza, voi ch'intrate'
この門をくぐる者は一切の希望を捨てよ

——ダンテ「神曲」より

HEROS

ペッタンP	3
うすら氷	4
如月樹	5
桃桃白	6
もとがし	7
へたを	11
有川古葉	27
じゅじゅまる	31
シャサスロウ	33
トキロン	35
松之神	43
くまんぬ	49
orih	57
やのかけ	63
ででぴん	67
屋良斗	71
めたれこ	77
ウサ野タタリ子	79
おじいちゃん	87
ゆであずき	88
taku629	89
解凍	90
Kの特急	91
央	97
ひびき	99
田宇マグろ!	101
雑魚P	105
卯月由羽	109
モンドP	111



ふんっ…んっ♡

悪のおチンポともめ…
なんて強さなんだ

熱くて…臭くて…
遅くて…はぁ♡♡
クラクラするわ…♡

でも、正義の力で…
アタシの…カラダで♡
最後の二竿まで
むじむじっ♡

とれだけキモチよくて…♡
何度おまんこイカされても…
アタシは、負け…

んはぁ♡
♡

秘密特訓 by 桃桃白



おしり おわり

そういうえば今日
レイナにさ

アンタいつまで
お子供なのよ

って云われ
ちゃってさ

はははは
ヒドイな
それは

光はもう
マンコもアナルも
経験済みで

レイナよりも
ずっと大人
なのにな

ほーんと
だよ♡

—南条光はセックス中毒だよって話—
描いた人：もとがし

ふう...

早い



それじゃ

次はアタシの番だね♡

れろ



おっおっおっ

うっ!!

んんんん



光……!! ちよ 激しすぎ……

まだイツちゃ駄目だよ プロデューサー

っっ♡

ちゅぽん

んん

プロデューサー
今度はこっちに
挿れて欲しいな



やれやれ

○歳でチンポの
味を覚えるなんて
光は悪い娘だ



違うよ
プロデューサー

来た来た

これは
愛だよ 愛!





スリ
れい
眠

はあ、
随分遅く
なっちゃった……



あれ？南条？
こんな時間まで、
事務所でなに……

ピン
グ
の
ピ
南
回
条

って、寝てるのか。



作：へたを



全然
起きない.....

つたく...:...
ホラ!起きろ!
事務所閉めるぞ!

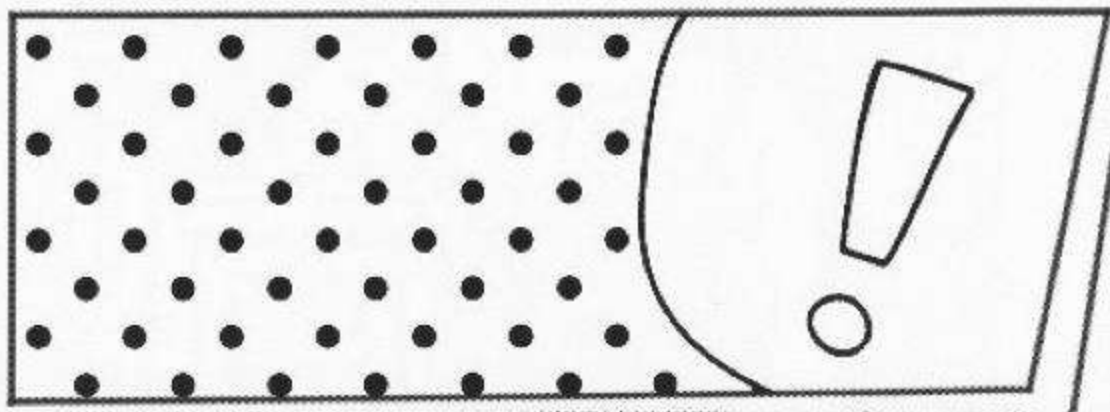


危ない。
危ない。
でもこれでも
起きないなんて



おっと。

ぼすっ



!

なんでもそれは

たしか、
今日の予定はレツスンだけ
こころなしかい匂い…

小関麗奈	レ	14:00 4Fス
星輝子	/	休
南条光	レ	16:00 5Fタ
龍崎薫	○	撮影 10:00

いやいやいやいやいやいやいやいやいやいや

まさかとは
思うが

ゴクッ

ズッ

着

け

て

な

い

て

て

ピュッ

あ

むぎゅっ

うて

て

て

て

て



待て待て待て待て



大人として、
護らなくちゃいけないんだ

こいつは一緒に
やつてきた
事務所の
アイドルだぞ



しかもまだ
14歳の少女じゃないか



だつてのに……!!



ウエイクアップ 勃起

しちまつてる……!!

毎日の仕事は
忙しく夜は
死んだように
寝るだけ

もう何日も
溜まってる
ところ

シャンプーの
混じった
香りと

成長してる
最中の
無防備な
少女を前に

我慢できる
わけがない……!!

スッ



カキカキ

ゴキ

カキ



びしよびしよじゃないか

トロオ...



おいおい



指くらいなら
簡単に入るな





イッたのが……



それにしても、
普段はあんなに元気で
少年みたいになこというやっが



この短時間ですっかり
女の顔をのぞかせてやがる



ムッ……

しかも、
これだけやって
起きる気配はない

だつたら



いくぞっ……!!

ズッ



あ

ズッ



どんどんと奥に引つ張られる……!!



な、なんだこれ……!!
動くたびに絡みついてきて
まるでチンコを
放そうとしない……!!

もう、
限界だ！

くそっ、
腰が止まらねえ！

あんっ
アッ
あっ
んっ

射精るっ！





犯ってしまった



た……





何かヌルヌルした
敵発見!!

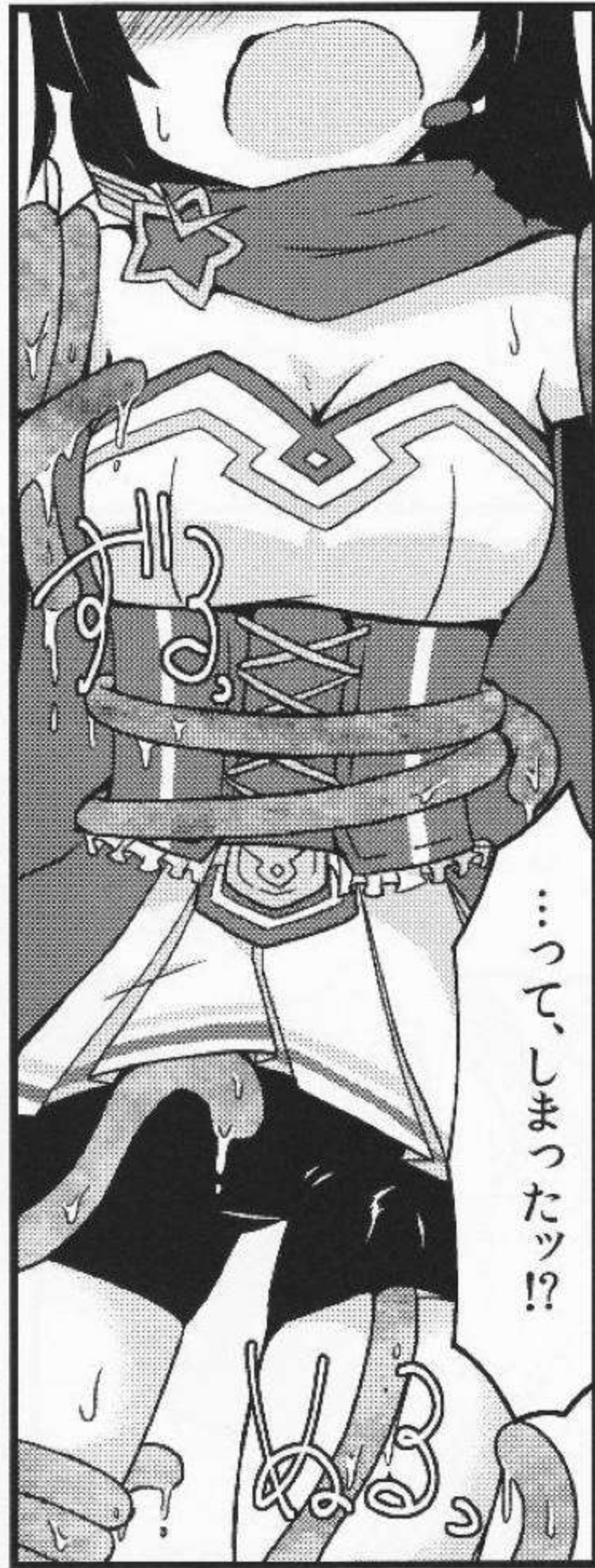
私が
つけてやる!!

タイトル：女性ヒーローの負け展開ってそそるよね(性癖mix)
描いた人：有川古藤

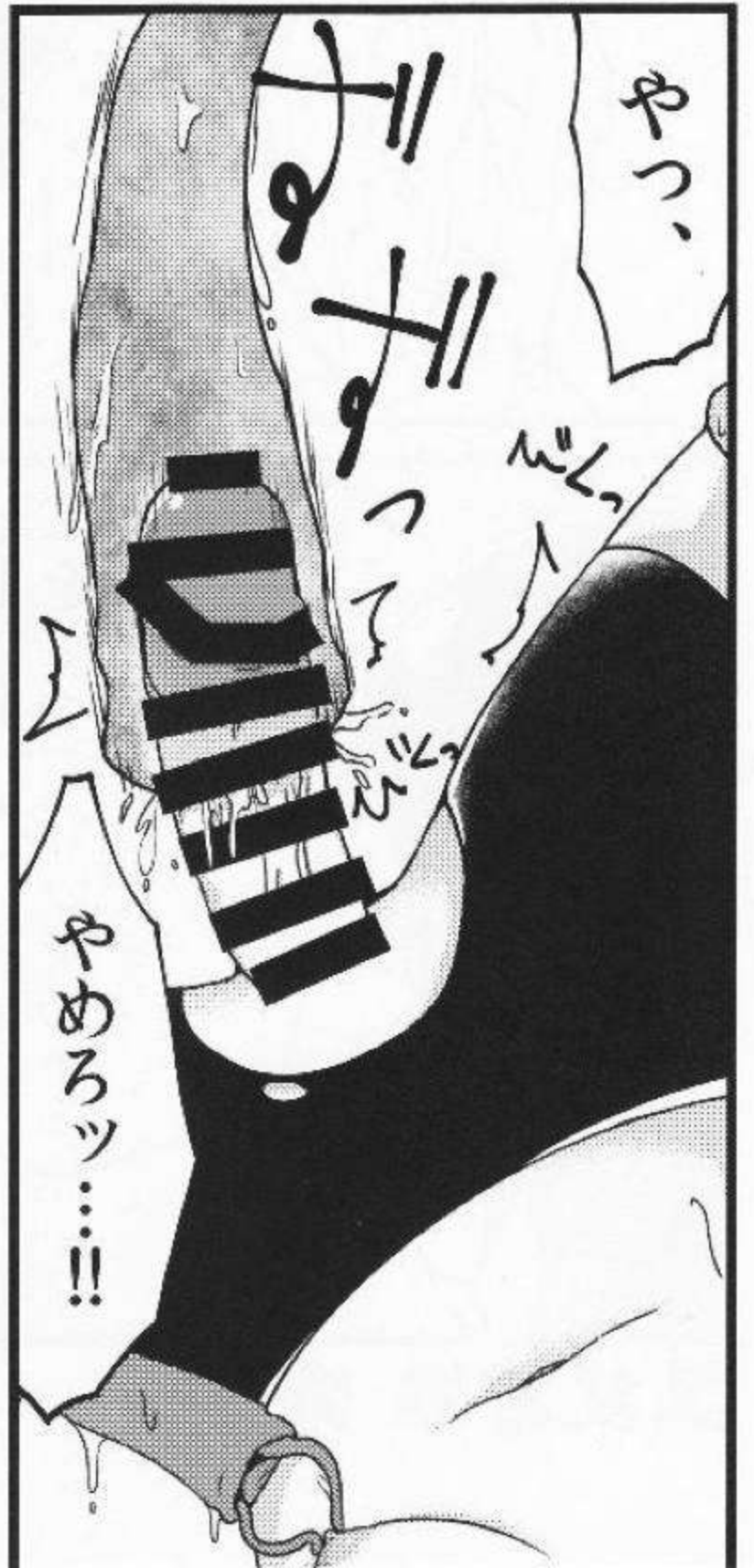


ちよっ...

なっ
何をすんだッ...!!



...って、しまったッ!?





ユメオチ オワリ





はらめつ光の俺の子供を産めえっ!!

アイドルに顔射しっ

ズルッ

やだっ

おっおっ

びく

ガッ

射精る!!



たつぷり中出ししたから妊娠確実だね♥

幸せな家庭を築こうな、光...♥

うわあああああなんじよおおお!!

夢オチ

おわり

やることヤツてりや
そりやそうなる！

たはは……

幾多もの、エロの世界を巡った
南条光。
その身体には、今や新たな生命
が宿っていたー！

ホムム

これ描いた変態：シャサブロウ







痛かったか？

痛い…

ジーンジーン
するけど…



それが

…気持ちいいんだ



アタシ
本当は…

悪の
コスチュームに
ドキドキ
してたんだ



それが
いやだったのに……

なのに
こうやって
プロデューサー
男の人を誘惑して……



これじゃあ……



悪い女なんだ



そろそろ
だろそろ
射精すぞ！



アタシは
なんて……



アタシは…



正義のヒーローじゃ
なかったのかなあ…

最近南条は
スカート穿いたり
悪役やったり…

急に趣旨がかわった
みたいじゃない！

アンタ
何か
知らない？

ああ
それは…

本当の自分に
気付かせて
あげたのさ



えへへ…
P、似合ってるかな？

南条ちゃんと
ピミツのレッスン♡
描いた人：松之神



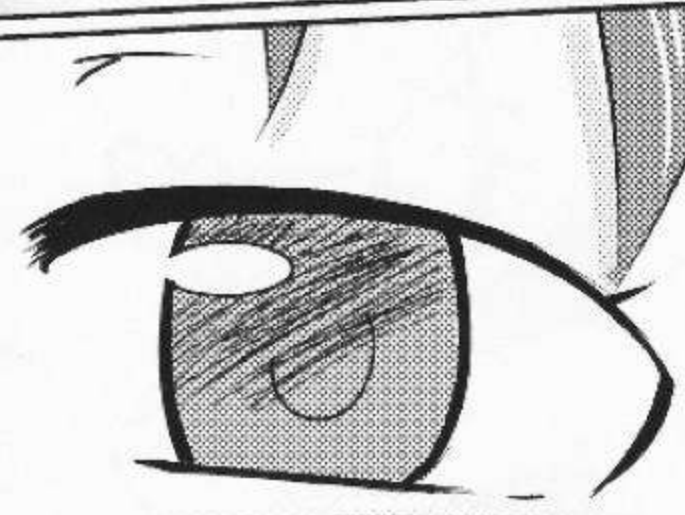
ボン♡



キュッ♡



ズッ!



もお…
しかたないなあ…♡

ギンギン!

あっ…!



ピュッ
いっぱい
ピュッピュ
出来たね……♡

あはっ♡
すげえ……!

びしょ♡
びしょ♡
ピュッ♡
びしょ♡



んっ♡
アタシ……
Pのが欲しくて……
もう我慢できないよ……♡
はっ♡

ジュッ♡
ジュッ♡
ジュッ♡
ジュッ♡

入っちゃった……

おちんちんが……

あん♡

ビク♡

ビク♡

ズク♡

は♡

じゅぽ♡

は♡

ん♡
Pも我慢しなくて
いいんだぞ……

は♡

気持ちいい……

じゅぽ♡

は♡

じゅぽ♡

じゅぽ♡

は♡

じゅぽ♡

じゅぽ♡

は♡

は♡



来て……っ♡

ビクビクしてる…
イキそうなのか？





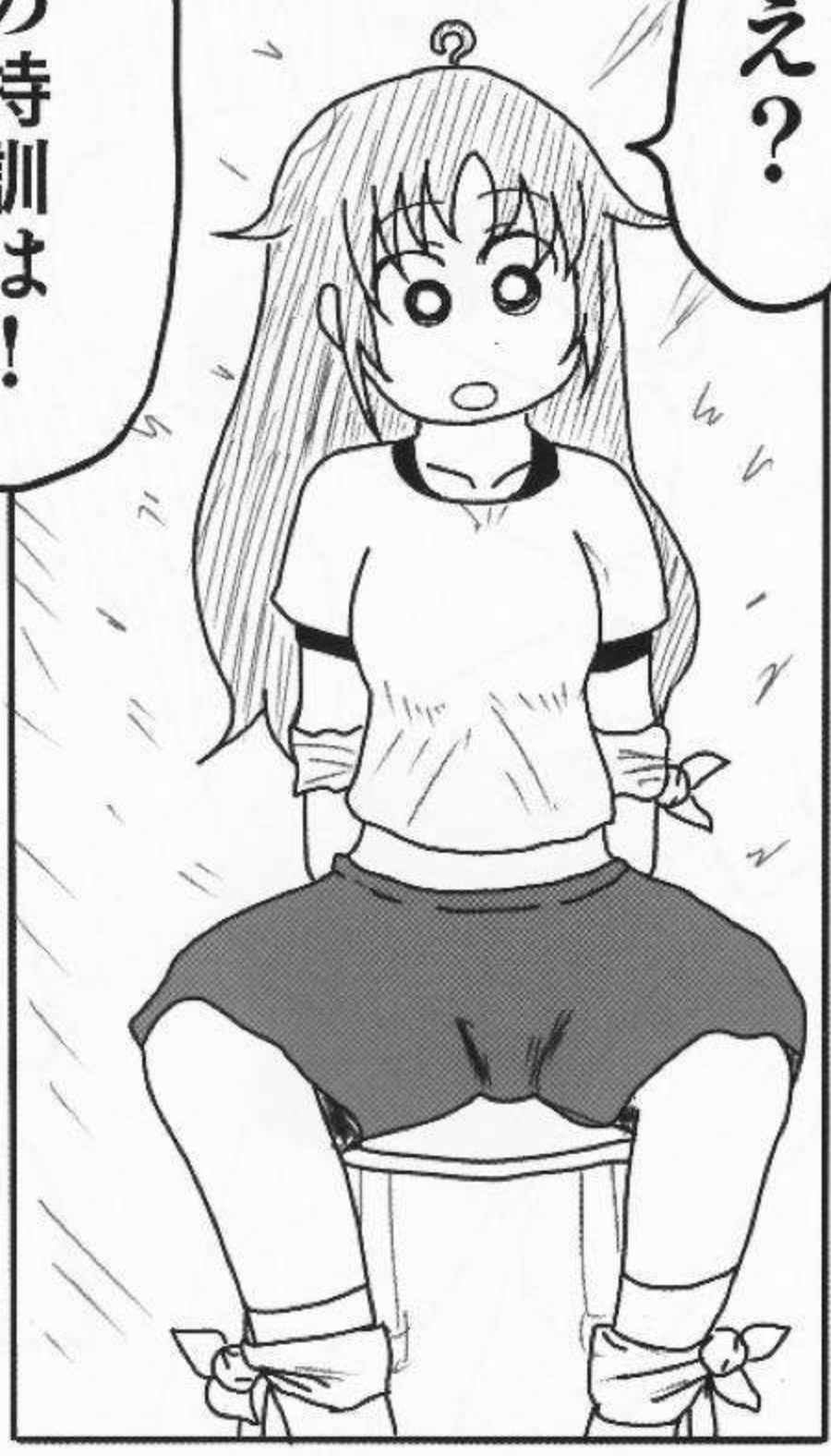


え？

ぽかん

今日の特訓は！

拷問耐久
レッスンだ！！



たまりに特撮で
負けて散り散り
になつたりとか
捕まったりとか
あるだろうか？

ヒーローは
仲間の情報を
売らないのだ！

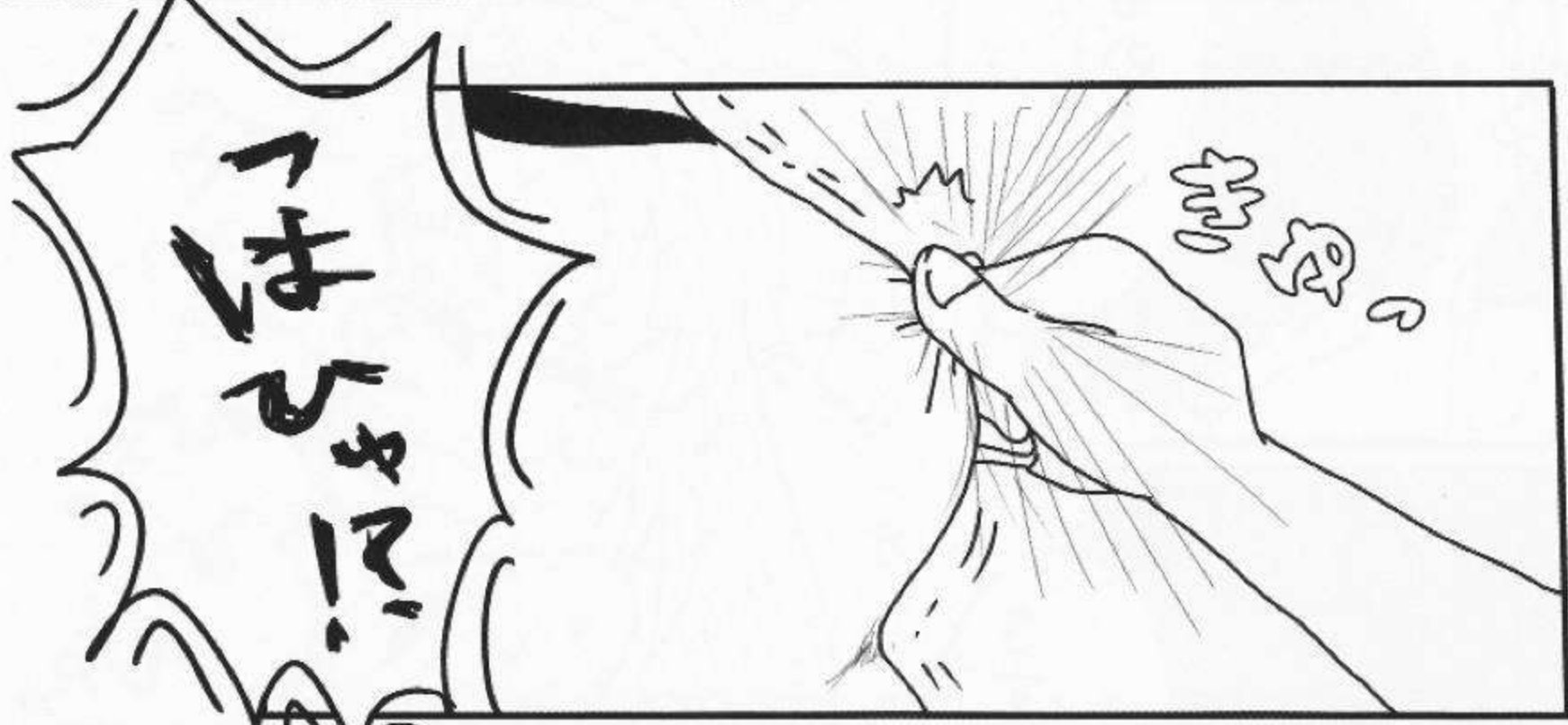


はっげんげん



ま、大事なアイドルを
傷物にするわけにも
いかんですし

拷問じゃなくて
くすぐりなんだが





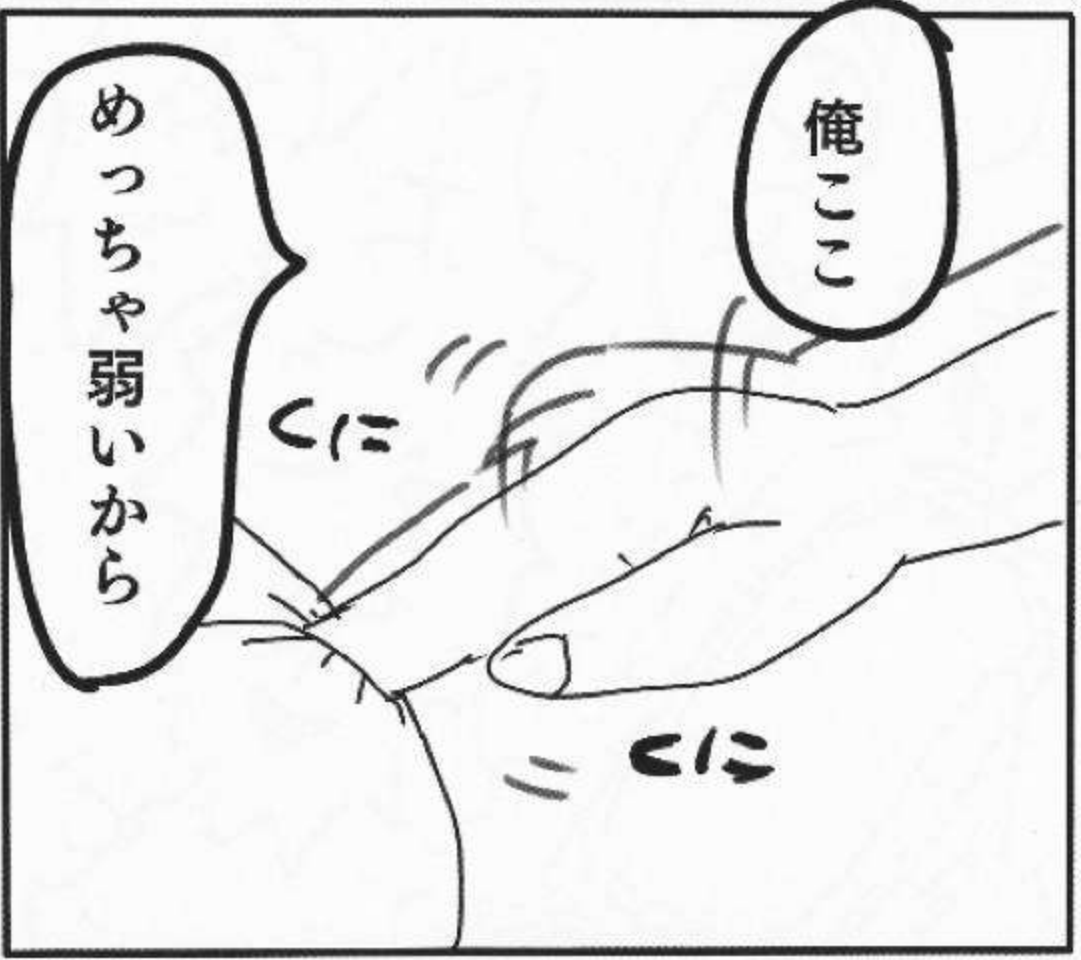
乳首ってすごい
くすぐったいじゃん？



いやほら・・・



めっちゃ弱いから



俺(こ)い

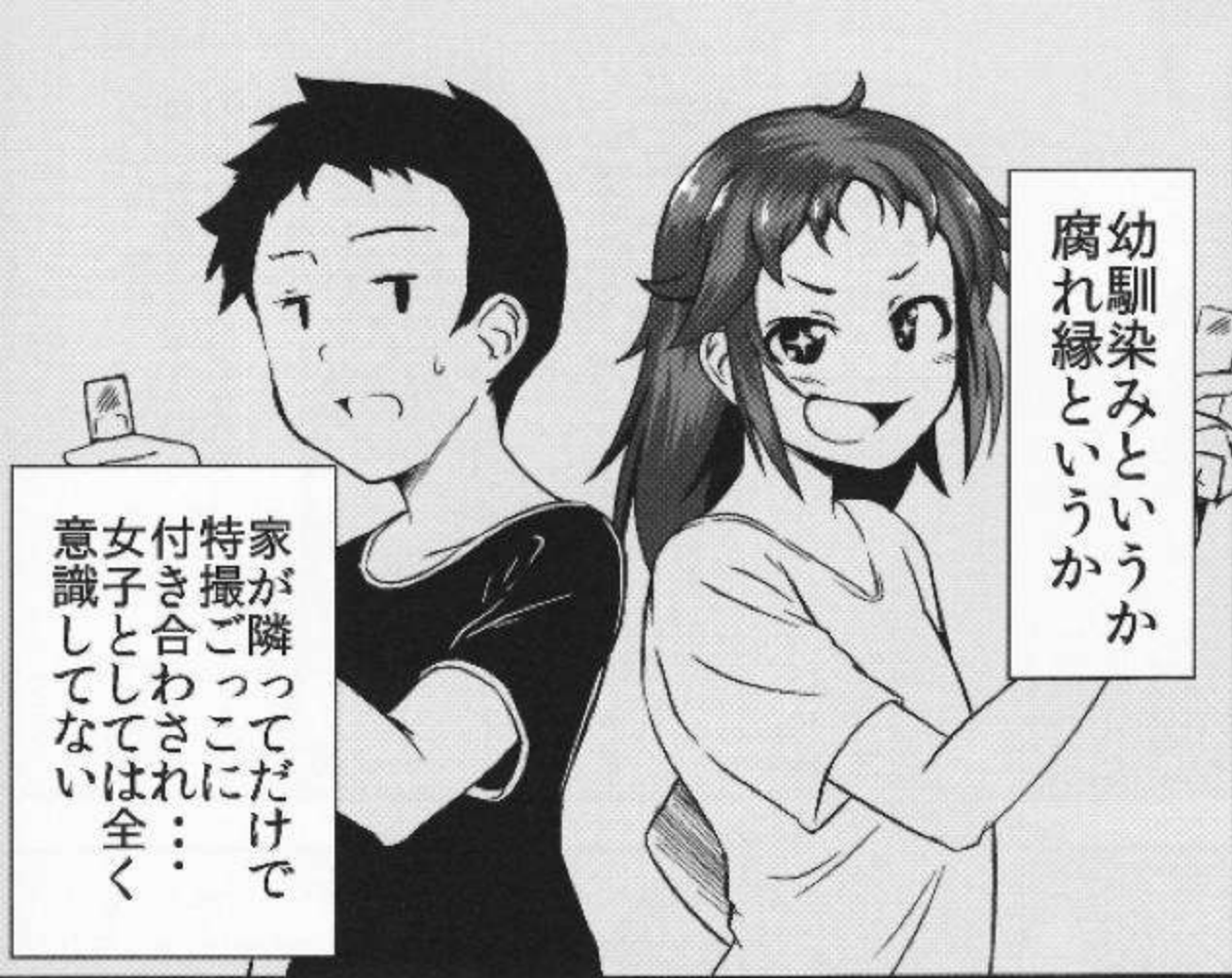


すごいって言うか



まだ耐えてるの





幼馴染みというか
腐れ縁というか

家が隣ってだけで
特撮ごっこに
付き合わせれ…
女子としては全
意識してない



こいつの名前は
南条光



ーない

ハズなん
だけど…



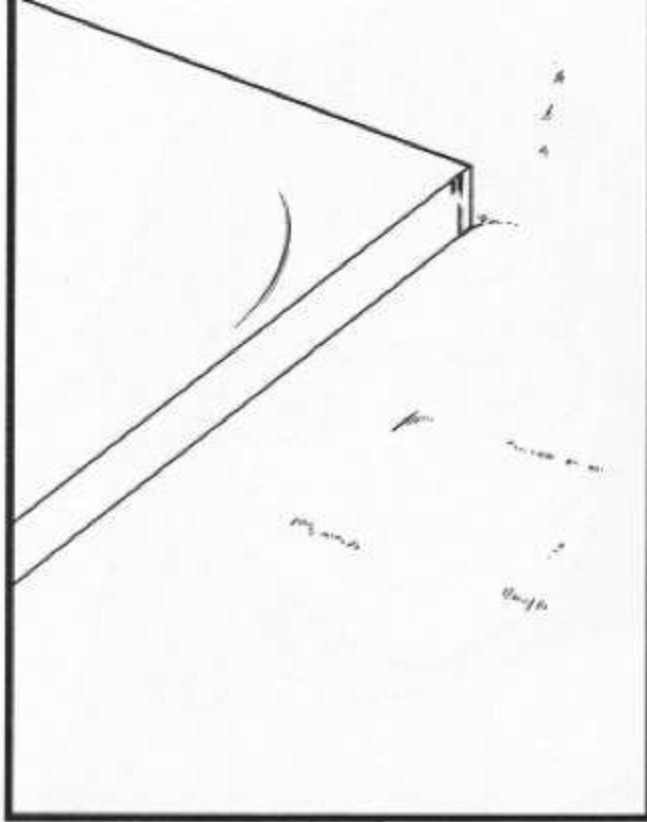
なあ…

その…

何で
こうなっ
てるんだ!?

きっと僕たちは南条光の幼馴染みだった

orih



放課後
—お前の家で
一緒に観るぞ！

確かこういう
やつ取りが
あって…



〇〇！昨日
真・仮面ライダーの
DVD借りてきたんだ！



めっちゃ
気まずいが…

※大人向け仮面ライダーの「真」には男女のヌードシーンやセックスの暗喩みたいなシーンがあるぞ！



む…胸とか
ハダカとか
興味…あるのか…？

男子は…〇〇は
やっぱり…その



—なあ



キラ



ああいう
おっばい…

やっぱり
こいつにも
あるんだよな…



…はい

お願いします…

ど… どうだ？

アタシの…
変じゃないか…？

うわ…
こいつ…

チビのくせに
おっぱいあるのか…!!

小さいころに
海とかで見たのと
全然違う…
いつの間にこんな…

なあ… その…
下も… 全部…
見せてほしい…

はあ!?
し…
下も!?

うん…
すげえ…



うおお…

これが…
本物のまんこ…

うう…
あんまりジロジロ
見るなよ…



だ…大体
不公平だ!

〇〇のも…
その…
見せてよ…!

!?



光が…
俺のを…
見せろって?

この流れ…
もしかして

相手は
光だけど…

いやそれは
この際
何でもいい

セックスが…
できる…!?

ブタン



あ……アタシは一体何を……!?

ばっ

服!服!



ただいまー

!?



お……お……

その後

同じチャンスは結局二度と来ることなく

じゃ
また明日!

あ……アタシ
帰るなっ!



思い出しては
今でも毎日
シユッている

あの日見た
幼馴染みの
アイドルの
全裸

ううっ

んんん

おわり



光はなんと
東京で
アイドルに
なってしまった

あらすじ
 なんやかんやで
 悪いおじさんに捕まって
 しまった南条くん。
 一体どうなっ
 しまうのか!?

おちこち 南条くん日記

作・やのかげ

駄目だよ光くん
 知らない人に
 着いてっちゃ〜

今日からじっくり
 女の子みために
 調教してあげるね

★南条くんとは、南条光が男体化した姿でありつまりそのなんだ…なんだ!?

一日目
 まずはアナルを
 じっくり慣らす：
 つもりだったけど
 アナルビーズを
 あっさり飲み込んで
 軽くイッた。みだ
 才能があるみたいで
 今後は楽しみだ。



八日目
 今日もお尻でイくのと
 ちんちんでイく感覚を
 結びつけるトレーニング。
 目隠ししてるときの
 反応が可愛くて
 つい調子に乗ったら
 潮を噴いて
 気絶してしまった：
 ごめんね光ちゃん♡



二十六日目
 従順になつてきたから
 拘束を解いて
 あげたのにな
 僕が目を離した隙に
 逃げようとした。に
 せつかく髪も伸びてきて
 女の子らしく
 なつてきたのに：
 また拘束して
 お仕置きしたら
 もう二度と逃げないって
 約束してくれたよ♡

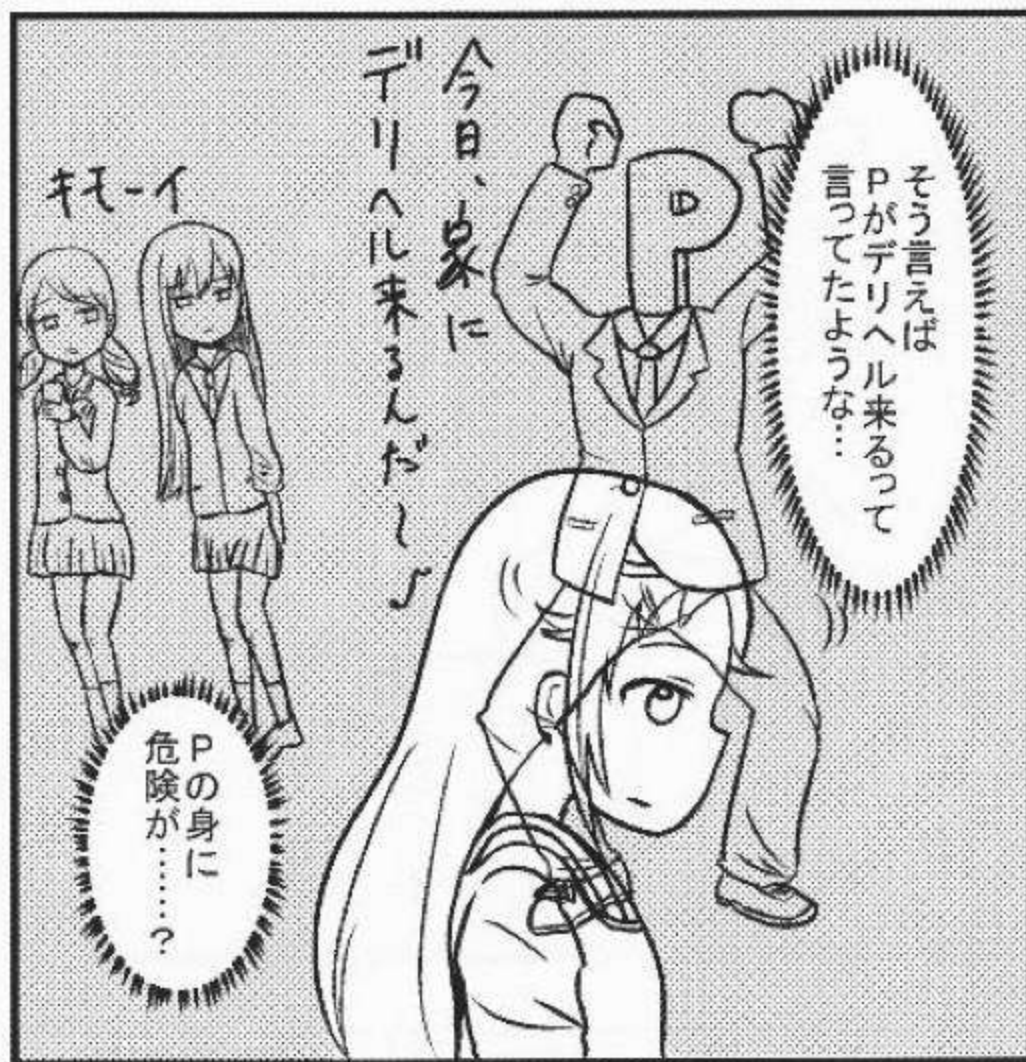
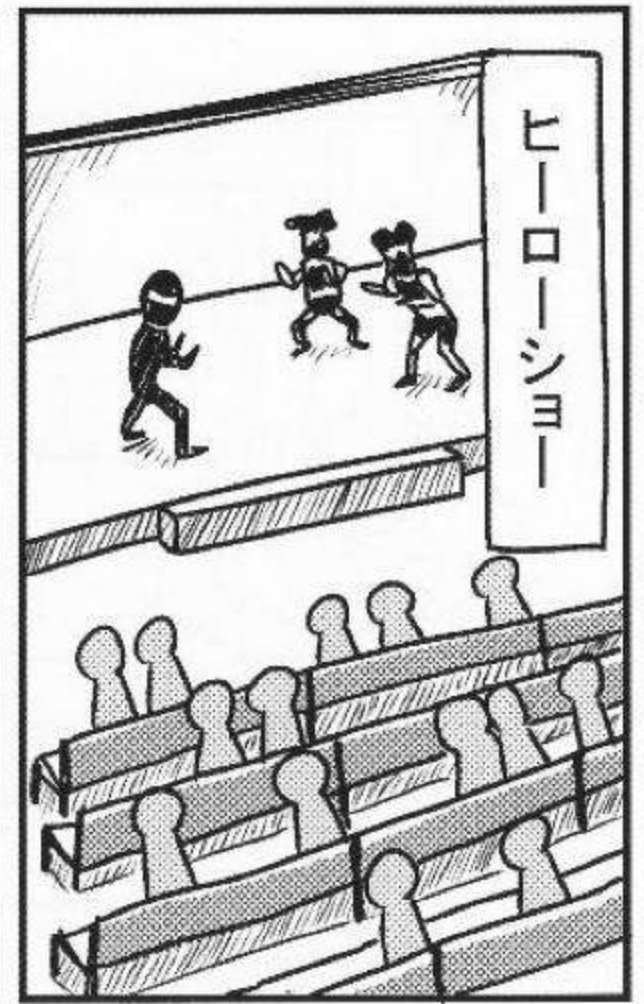
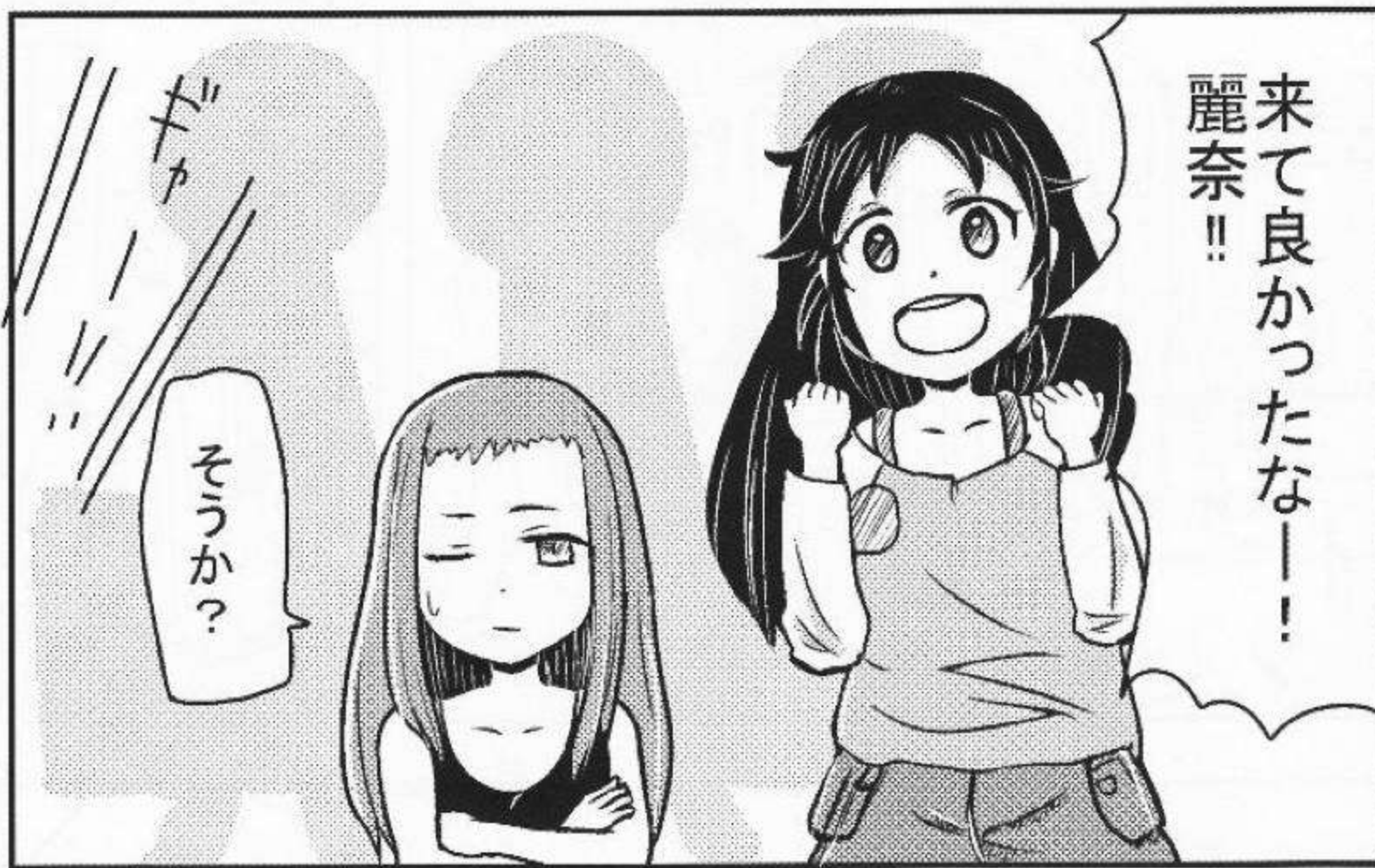
三十日目
この前のお仕置きで
やりすぎたのか、
睾丸が壊れちゃった
みたい。
握っただけで
軽くイくように。
薬の副作用か
母乳もでるよう
になった。

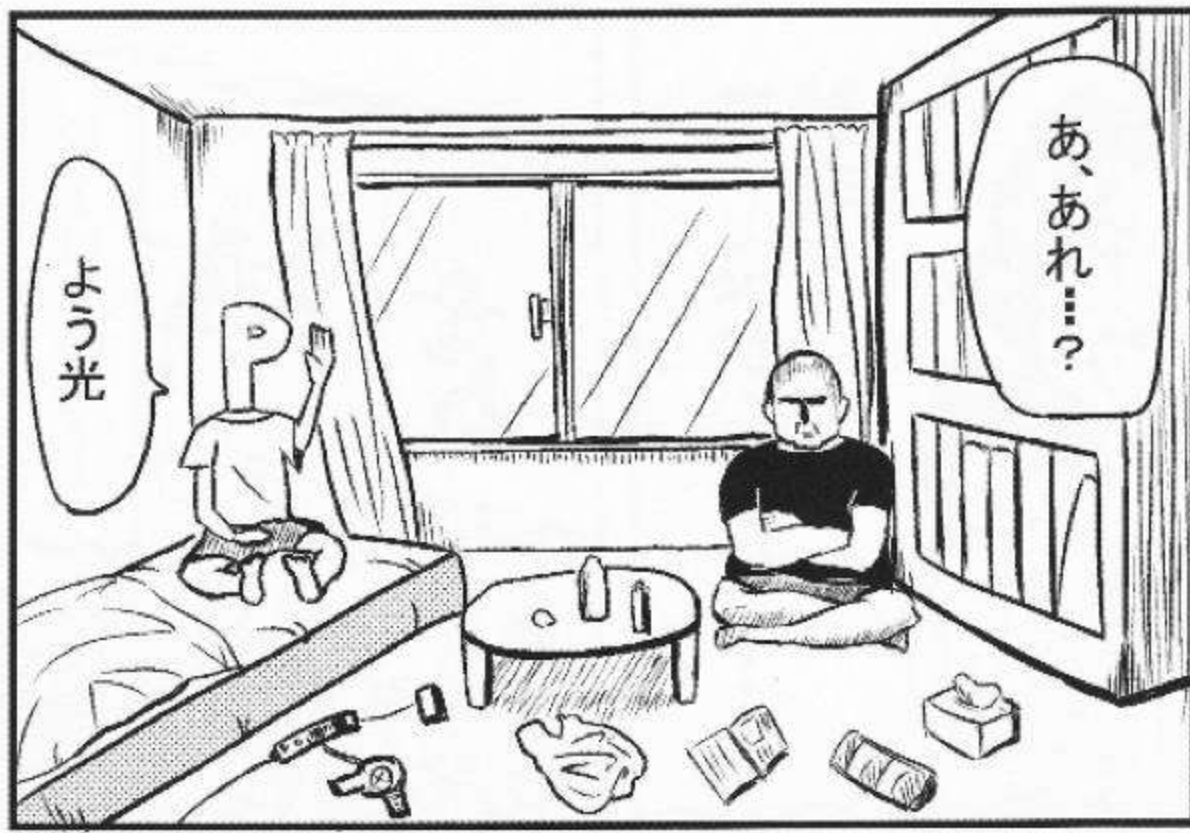


五十八日目の
沢山の調教の
甲斐あって
心身共にメ
すっかりメ
記念に写真
これをみた
元プロデュ
どんな反応
楽しんでね
楽し
心
はっ
はっ



END...







セックスするからに
決まってるだろ!!

いやあああ
あああああ
ああ!!



よく言った光!

あの…
なぜ服を



やめて
プロヂューサー!!

安心しろ
本郷猛もこうやって
改造されたんだぞ



いや…

下も脱ごうね



セックスと



よっしよ



ああああああああああ
ああああああああああ
ああああああああああ
アアアアアア

ふう

ああ…
中に…



やべっ
イキそう

え!!
もう!!
いつまで!?



な、中に出てない!!

でも何故…?



よく見ろ

Eドイ…

シクシク…



HAPPY
ENDO♡

プロデューサー!!

chu♡



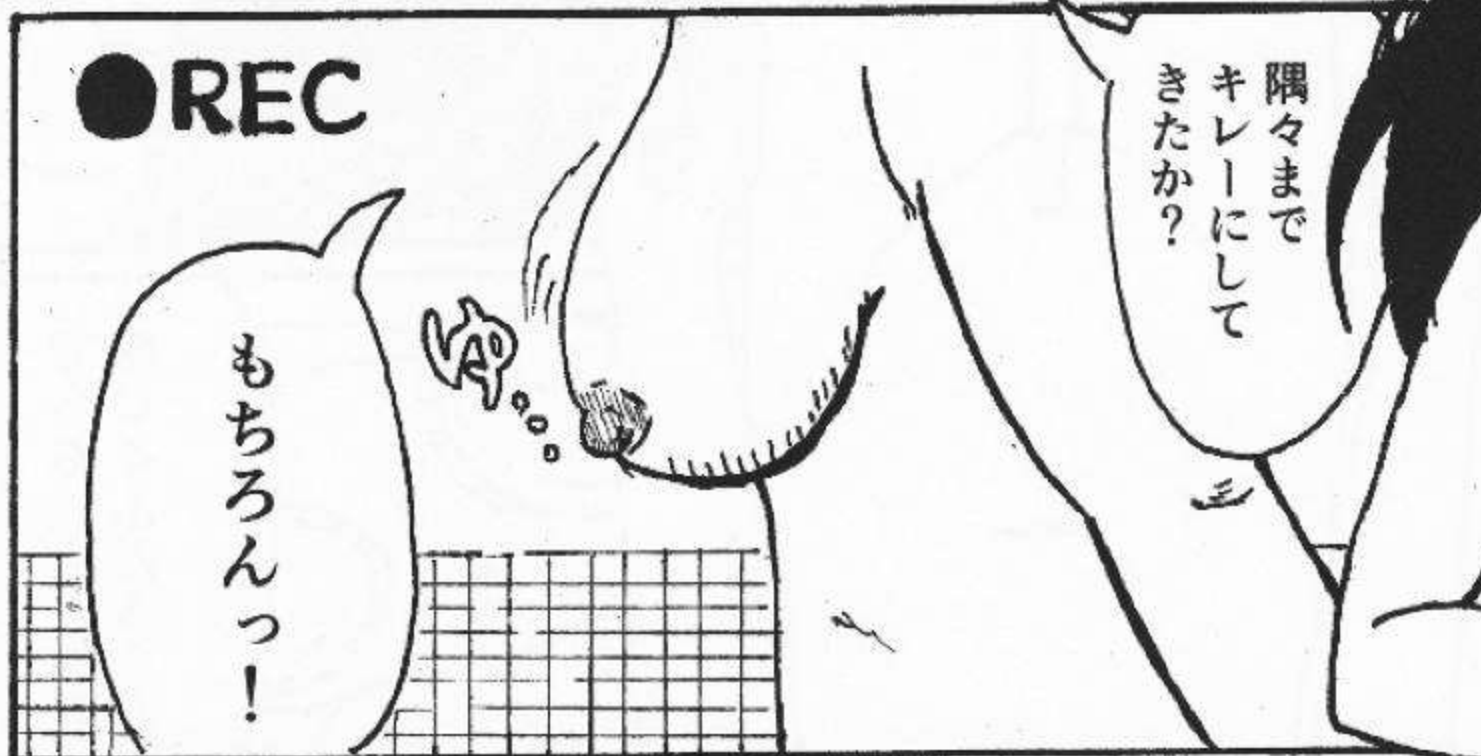
本当は
おっさんのケツに
中出し

アホ!
アイドルを傷つける
プロデューサーが
どこにいる



おっ、
来たか

デューロ
デューロ
サッ!

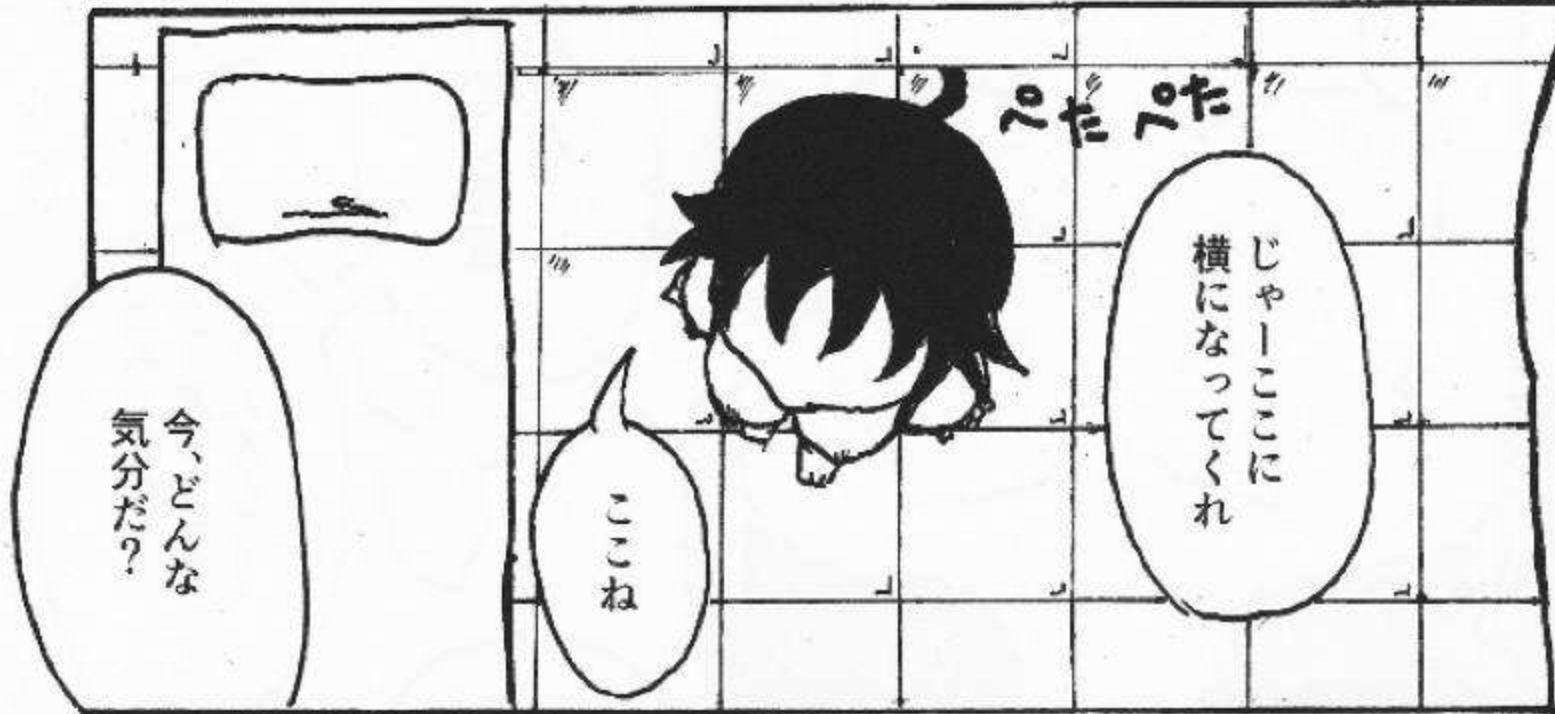


●REC

隅々まで
キレーにして
きたか?

もちろんっ!

ウ...



たまたま

じゃーここに
横になってくれ

ここね

今、どんな
気分だ?



アタシにとって
最後の仕事だ

みんなを
笑顔にする、
それだけだ

すあっ

たまたま

●REC

これで痛みが
軽くなる

つくづくお前は
面白いなア

当たり前さ！
アタシはアイドルで
ヒーローだからな！

そう、
そういうヤツ

お前の
プロデューサーに
なれて良かったよ

あっ…
なんか体が
ふわふわ
してきた…

よし

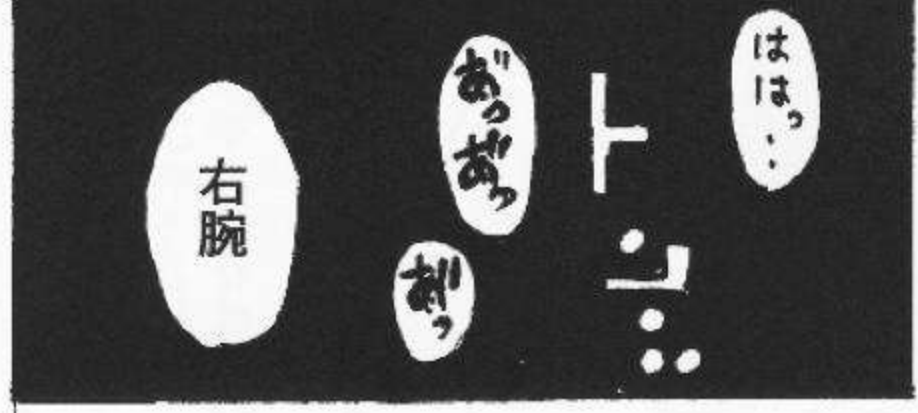
じゃあ
行くぞー

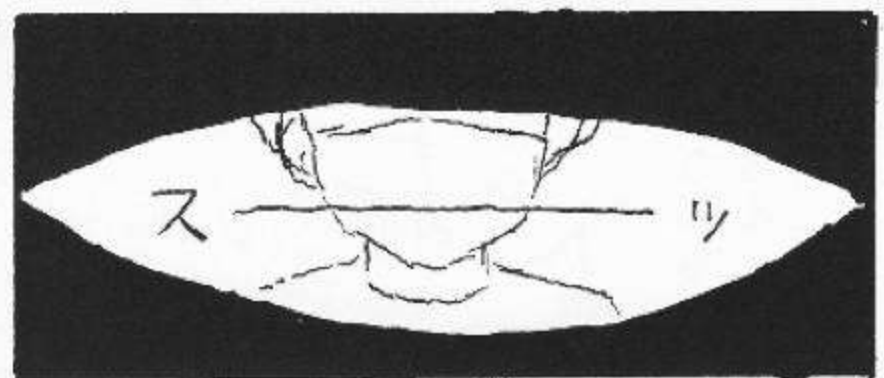
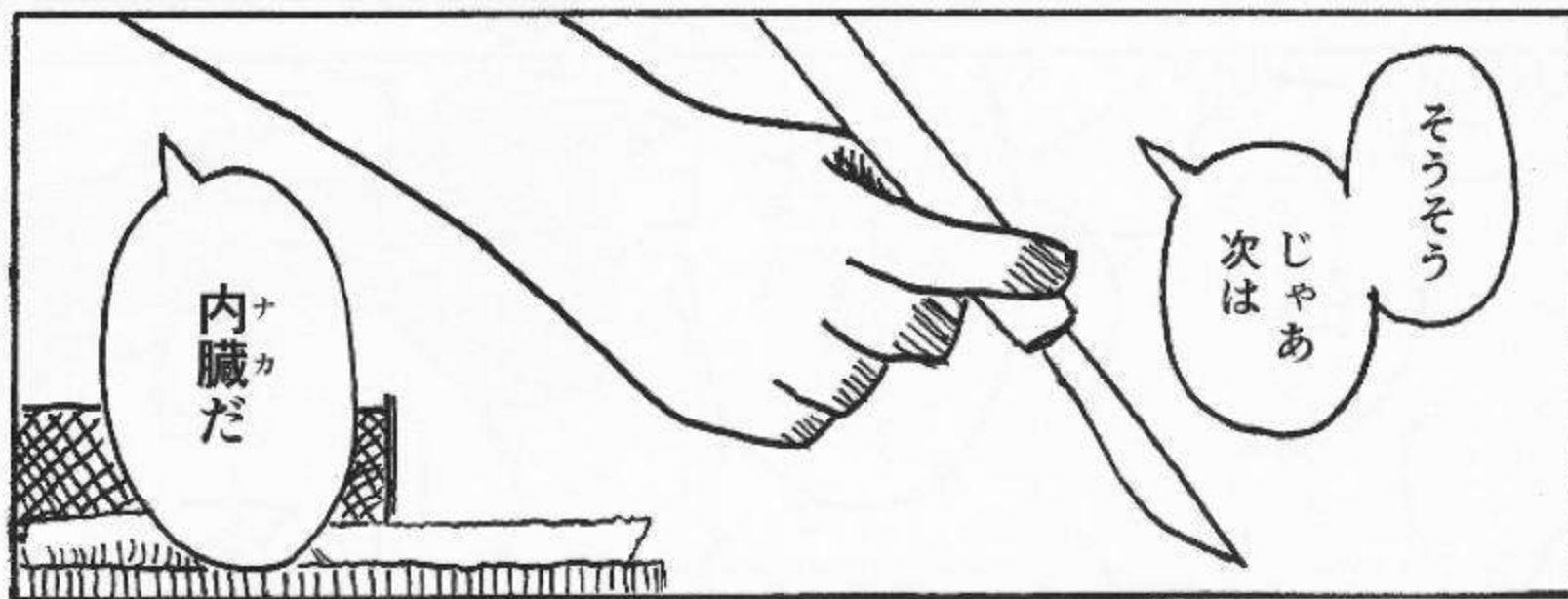
でもちゃんと痛みは
感じるんだろう？

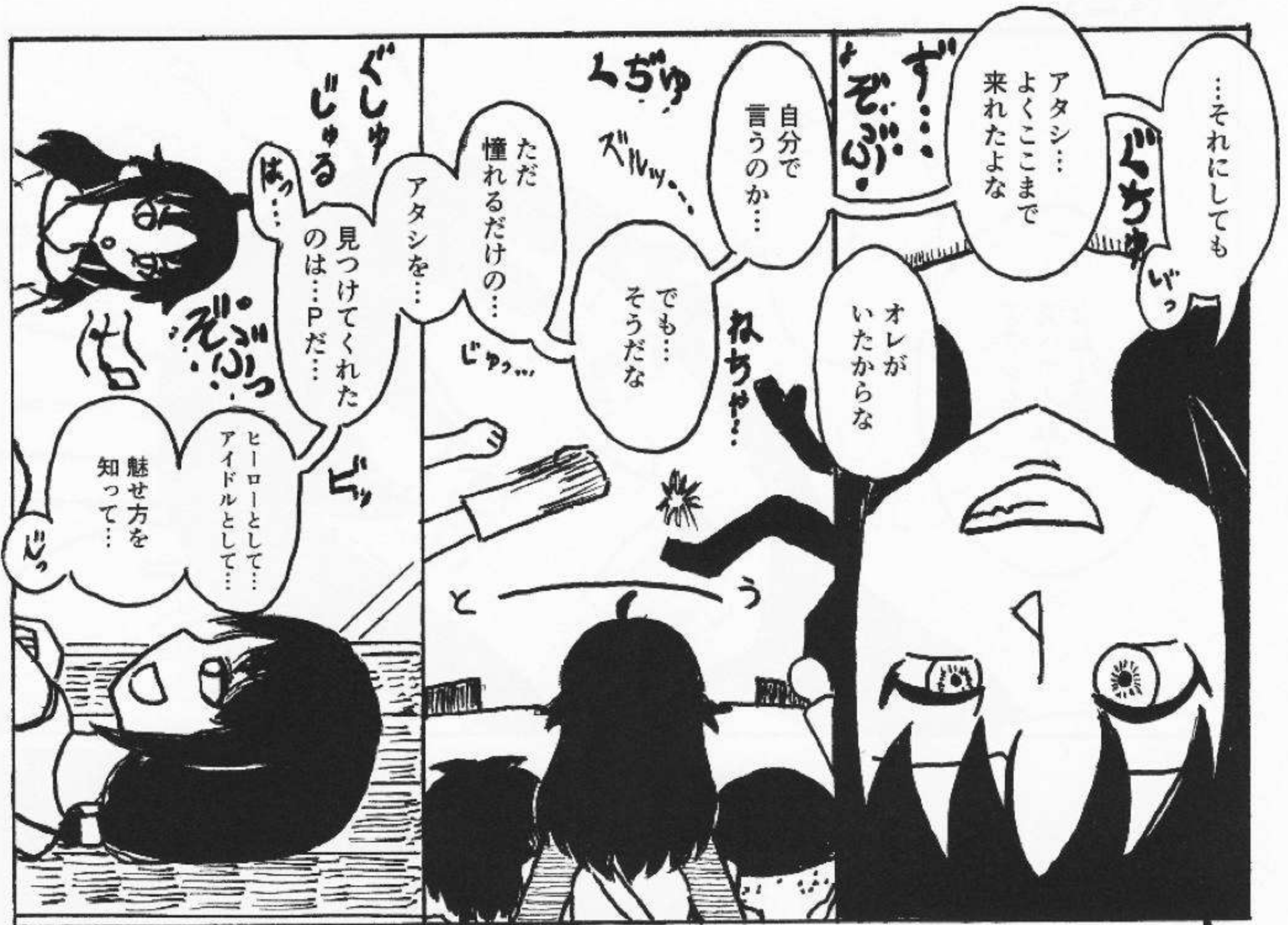
お前の要望
通りな

痛みや意識を
全く無くす事だって
できたんだぞ？

一度きりの、そして
みんなの為の痛みだもん
アタシのこの身で
受け止めたんだ



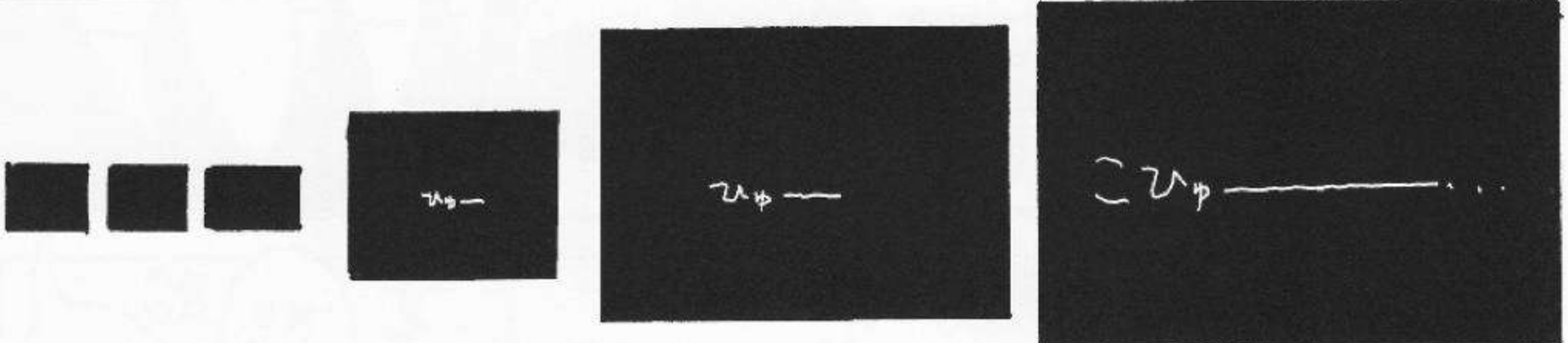






アタシを
食べてくれる…
よね…?

Pも…



アレが食べる
モンじゃあ
ないよ…

おまえは
アイドルは

…



南条光缶
大好評
発売中!

みんなと一緒に
いただきます!

抽選で
解体映像が
当たる!

おしまい



桃華……ちゃん？

もう、光さん
お目覚めが遅すぎですわよ
でも、これで
始められますわね

う……



お気づきに
なりませんの？

もっと重要なことに



さてと……
みなさんごきげんよう
櫻井桃華の『お嬢メシ』

今回は
一部の「特別な方」しかご覧
いただけない、プレミアム回ですわ



待ってくれ桃華ちゃん、
お嬢メシだって!?
それに、なんでアタシは
ハダカなんだ!

あら、確かに裸みたいなの
ドレスですけど



光さん!



本日
いただくのは……

では



え、あれ

あ、う、あ



自分の目を
「直接見る」なんて
経験

それでは……
いただきます!

いっ?

そうそう
出来るものでは
ありませんわよ?



そんなに泣かれては
その青い瞳の美しさも
台無しですわ!



ほら

よくご覧に
なって



光さんが限界
みたいですので、
今回はここまで
次回はフトモモを
いただきますわ!

おわり



なに?

ああ、このエグミ
光さんのがんばってきた14年間を

なに、それ

直接味わって
いるかのよう

アタシ、の?

実は、
光さんを初めて
事務所でお見かけ
した時から、
その瞳を口にして
みたいと……
あらまあ!

目
フトモモ

ここは
どこ…？

はあ

はーっ

はーっ

えーつと
たしか…

HERO

ウサ野々々リ子

ロケの休憩中に
怪しげな建物を
みつけて

ヒーロー研究所

返事がないので
中に入ろうと
したところを…

?

思い出した！
アタシは…
アタシは…

ッ!
!?

あつ…あつ…!!
アタシのからだ…
なにこれ…なに!?

はっ
はっ

なんで…なにが…どう
ああつ…あつ…いやあつ
いやあああああつ!

はっ
はっ



やあ!
ようやく
起きた
かい?

プロデューサー!?!
どうして…あつ…
どうしてこんなつ!

んー? もちろん
君をヒーローにする為に
決まってるじゃないか!

戦国P

いいかい?





なにこれ
なにこれ
なにこれ

はっ

はっ

ああああ…
アタシが
あやしじゃ…

嫌だ嫌だ嫌だ
怖い怖い怖い
嫌だ嫌だ嫌だ

はっ

はっ

なくなる

はっ

はっ

はっ

はっ

では
テストを
はじめよう

はっ

よーし
フェラは合格だ
次はおねだりを
してごらん

は

ふん



ドクドク

あ

え…えっちな
ヒーロー南条光の
お〇んこに…

プロデューサーの
音撃棒を…奥まで…
叩き込んでくれっ

あは

おねだりも
合格だッ!

ズッ
ズッ
ズッ

後ろの具合は
どうだ?

ズッ
ズッ
ズッ

気持ちいいか?
バックは好きか?

ズッ
ズッ

南条光

(うちの事務所仕様)

描いた人：おじいちゃん







ちよっ、Pっ…
日曜の朝はだめだっ…
いまいいところ…っ

ん
あっ

♡

{ }

クチユ

Illust: 解凍

クチユ

南条光と実際に性行為をする為の考察 —オナホールのお迎えという観点から—

Kの特急

はじめに

この文章は「禁同人誌には珍しい(?)」評論に属するものである。基本的に男性向けの「禁同人誌は美少女との性行為が行われているイラストや小説が殆どであるから、このような評論は少し風変わりかもしれない」

この同人誌では、イラストや小説などで南条光がえっちな目に遭っている。然らば、ここでも「禁同人誌にふさわしい内容の文章を書くべきだろう。様々な構想を張り巡らせる中で、私は一つの答えにたどり着いた。『せっかく南条光がえっちな目に遭うのだから、それを漫画やSSの中だけじゃなくて現実でも出来るようにすれば良いのではないか?!』」

しかし、南条光を筆頭とする「THE IDOLM@STER」シリーズのアイドルは所謂「二次元アイドル」に属する。この事から、彼女達との性行為に至るのは極めて難しいように思える。読者の中には三次元で性行為を行える相手がいる可能性もあるが、その相手は南条光ではない事は明白である。ましてやこの本に描かれている事を実際に再現しようとなると、読者の皆様方が早苗さんのお世話になりかねない可能性がある。南条光との性行為を実現するにあたっては、以上のような障壁がある。しかし、必ずしも担当アイドルとの性行為が実現できない訳ではない。女性との性行為を疑似的に実現するための道具として、オナホールが存在する。これを用いる事で、南条光との誠意行為を実現すれば良いのである。したがって、当文章では「南条光との性行為を現実で行うための必需品」として、彼女の陰部に近いオナホールの構造について考える。なお、南条光を含めこの文章で取り上げたアイドルの陰内に関しては、全て私の妄想に基づく私見である事をご留意頂きたい。また、私はオナホールを「買う

」のではなく「お迎えする」のが正しい表現であると考えている。よって当文書ではオナホールの数え方を「二人、三人」と表記する。

第一章 何故南条光の「禁二次創作は少ないのか

南条光っぽいオナホールの構造を考えるにあたって、重大な壁となるのは間違いなく彼女の「禁要素との結び付けにくさである。大手イラスト投稿サイトPixivにおける彼女のイラスト総数は、2017年2月現在1,818枚に上る。『シンデレラガールズ』(以下モバマス)のアイドルでイラスト枚数が近似するアイドルとして、櫻井桃華(1,765枚)²、佐々木千枝(1,788枚)³、向井拓海(1,753枚)⁴が挙げられる。

しかし、これらのアイドルと比較すると、南条光の「禁イラストは格段に少ない(図1)。先に挙げた他のアイドルの「禁率が概ね1/2割程度である一方、南条光の「禁イラストは僅か5枚と、唯一1割を切っている。当同人誌も「成人向け二次創作作品が少ない南条光の成人向け合同誌を作ることにより、南条光の二次創作の幅(これは成人向けに限らない)が広がるようにと企画された。」⁵とあり、「禁作品の少なさは一つの問題として認識されている。そこで、まずは南条光の「禁二次創作の少なさに着目する事で、既存の問題を整理する。」

① 性格が少年寄りに見られる

Twitterで南条光の呼称を検索すると、「南条くん」という表記がそれなりに目立つ。これはやはり、彼女のヒーローを目指す姿勢が大きく影響しているものと考えられる。その明快な姿勢は担当プロデューサー以外からも高評価を得ており、彼女を生き生きと描写した格好良い作品が多く発表されている。更に、他作品とのクロスオーバーが容易かつ、多くのプロデューサーにとって馴染み深い特撮鑑賞を趣味とする事から、SS等の二次創作にも比較的出演させやすい。こうした感情移入のしやすさから、カードの枚数の少なさに反して根強い人気を持っているといえる。

加えて南条光が少年らしさを持つ事は他のアイドルにも認知されており、『シンデレラガールズ劇場』では藤居朋と井村雪菜が「男子脳を持つアイドル」とし

て南条光を挙げている⁶。但し、この「コマでは横山千佳・池袋晶葉も同様の考えを持つアイドルとして連想されている⁷。また、モバマス内で他に少年らしさが第一印象に現れやすいアイドルとして結城晴や桐野アヤがおり、少年らしさが南条光の専売特許と言うわけではない。

それでは何故南条光の「禁イラストの連想は難しいのか。それはプロデューサーとの関係性に現れていると見られる。ここで挙げた他のアイドルは親愛度MAXや他のアイドルとの関わりから、女の子らしさを見せるセリフが少なからずある。一方で南条光に関しては「一枚目のカードである『小さな英雄』の時点でプロデューサーを相棒として見る立ち位置が決められている。現在までに若干の進展・変化こそあったものの、その関係性はそれほど変わらない。

特に純愛系の作品であれば性行為は恋愛の延長線上にあるから、心的描写を深くするうえでも性格面が重視される事が望ましい。故に五十嵐響子や佐久間まゆのように、プロデューサーに対する積極性が高いほど、一線を越えたいうでの性的な連想が容易に行えると考えられる。他方で南条光の場合、まずは恋愛描写を想像する必要があり、その難しさが彼女の「禁作品の少なさに直結している事は否めないだろう。

② プロフィールから性的嗜好を連想しにくい

「禁関連の男性向け二次創作を行う際の材料として、性格だけでなく体型も重要な構成要素となる事は最早言うまでもない。先に述べた性格面が精神的な性的欲求を満たすのに対し、こちらは視覚的な性的欲求に作用する。したがって、イラスト一枚で鑑賞者の性的欲求を満たす場合は、体型面が特に重要視されるものと見られる。

及川雫や向井拓海が特に顕著であるが、豊かな乳房を持つアイドルに関しては、搾乳やパイズリなどの乳房を強調したイラストが描かれる事が多い。逆に如月千早のように貧乳であっても、それ相応の性的嗜好を満たすことが可能となっている。また、乳房だけでなく臀部も性的欲求を満たす部位として重要視されており、四条貴音や榎原志保のように大きな尻を強調したイラストが目立つアイドルも存在する。彼女達のように

スリーサイズから明確な性的嗜好を連想しやすいアイドルは、特徴的な部位を強調した禁作品が多くなっている。

これらの特徴を踏まえたうえで、南条光のスリーサイズを確認する。B:79-W:58-H:80と、バストとウエストの差はそれなりにあり、「実はスタイルが良い」という意見も存在する。とは言え目に見えるインパクトが薄いのか、或いは「二歳と言う成長期途上の年齢であるためか、「南条光は巨乳である」という印象に繋がる事例はそこまで多くない。事実、モバマスでは2010年に追加された「ジャスティスブレイズ」において、初めて胸が強調されたイラストが登場したものの、水着や露出度の高い衣装のように、体型が直接反映された姿のカードは未だ存在しない。また、「スターライトステージ」（以下デレステ）の3Dモデルに関して、胸囲が小さいモデルが使用されている。一方で過去に我那覇響やメアリー・コ克蘭で見られた数値の下方修正もなく、南条光の数値が実際に正しいのかどうかに関する公式からの答えは現時点では存在しない。

③カップリングが百合に直結しにくい

男性向け/女性向けに関わらず、禁作品には同性間の性行為を描いたものも存在する。こうした作品の場合、公式によって提示されたカップリングを、そのまま恋愛描写や性行為に反映する事例がよく見られる。モバマスにおいてカップリングの恩恵を強く受けた例として、多田李衣菜が挙げられる。彼女はかつて「ポケットモンスター」に登場するポケモン・ニドクインよりも「禁イラスト」の枚数が少ないと言われるなど、枚数の乖離が非常に強調されていた時期がある。しかし、アニメの放映以降、劇中で結成されたユニット・アスタリスクの相方である前川みくとの百合を描いた

禁イラストや同人誌が増加している。元より前川みくとの禁イラストや同人誌は根強い人気を得ており、その効果が百合に結びつくことで李衣菜にも波及したと考えられる。

南条光のカップリング対象となるアイドルの一例として、小関麗奈や三好紗南が挙げられる。しかし、特に麗奈との関係性に見られるように、これらのアイドルとの関わりはライバルとして、あるいは趣味を通じた友情関係を描いたものが多く、アスタリスクの2人のように恋愛に直結するようなイラストは珍しい。唯一の例外として怪盗公演以降関わりが深まった有浦柑奈が挙げられるが、これは「シーフパートナー」有浦柑奈の台詞において、「愛ゆえに、悪に身をおとす女泥棒」と言う彼女の公演内での立ち位置が明確に示されている事が作用しているのだと考えられる。このように、南条光と他のアイドルの関わりは恋愛よりも友情のイメージが大きく表れている。彼女の少年らしさを勘案すると、少年漫画のような爽やかな友情がイメージとして連想しやすいものとみられる。

ここまでの要素を総括すると、南条光は全年齢の二次創作では非常に活用しやすいが禁要素を連想しにくく、イラストの比率に対してもその特徴がそのまま反映されていると考えられる。①②③で整理したように、「少年らしく格好良いヒーローアイドル」としての南条光が広く知られている一方で、「思春期に位置する二歳の少女」としての南条光の情報がそこまで多くない。こうした連想の難しさがそのまま現状に繋がっていると言える。

だが、決して悲観する事はない。この同人誌が禁二次創作の少なさに対し活路を開くものである事は間違いない。この同人誌には純愛/凌辱面の双方で様々な作品があり、「南条光と性描写」に関する新たな解釈を提示し得るだろう。南条光の二次創作における禁関連の連想をより柔軟なものにする点で、この同人誌が良い影響を与えるものとして働く事に期待したい。

第二章 南条光の膈内を考える

前章では既存の事例を整理する形で、南条光の禁二次創作の少なさについて分析した。それでも前章で

の問題提起にもある通り、アイドルの膈内を考えたい。オナホルのお迎えに結実させるために、「禁関連の二次創作・連想があるに越したことはない。禁関連の二次創作でも論述するが、多種多様にわたるオナホルの中からアイドルの膈内に合致したものを採る際には、「そのアイドルと性行為をするとどんな反応が見られるか」「狭さや締めまり具合はどの程度か」と言った連想を行う事が望ましい。こうした考察を先に行う事で、よりアイドルの膈内に合致したオナホルをお迎えできるからである。その際に公式の情報や禁関連の二次創作が参考資料として活かせるのは最早言うまでもない。

したがって、ここでは比較例かつ南条光を含めた複数人での性行為を行う上での指標として、前章で南条光と関わりが深いアイドルとして挙げた二人の膈内構造を先に考察する。

①小関麗奈

イタズラクイーンであり南条光の永遠のライバルである小関麗奈だが、その体格は南条光同様子供のものである。また、「イタズラ☆クイーン」や「ライプリージョーカー」のイラストに現れているように、隙を見せる姿も時たま見られる。この事から、麗奈は性行為時にも主導を握ろうとしながらも、プロデュサーの男性器を受け入れる際には焦りを見せる可能性がある。故に膈への挿入に時間がかかるのは明白であり、処女喪失後も何度かゆっくり慣らしてあげないと麗奈本人が痛がるように思える。本人はいたって強気だろうが、膈内射精まで優しくしてあげないと性行為そのものを忌避してしまうかもしれない。

故に膈内構造は狭くきついものであると考えられる。狭隘な構造をしたオナホルは主に幼女の膈内を再現したものに多く存在するので、それらを充当するのが理想形であると考える。とは言え本人が嫌がらないように、なるべくゆっくり挿入する事を推奨する。この為愛液も滑りが良い低粘度のものを再現するのが良いだろう。

これらの内容を踏まえると、小関麗奈の膈内に関しては以下のようなものが想定される。

- ・成熟度…小
- ・締め付け…かなりキツめ（激しくすると壊れる恐れあり）
- ・愛液の粘度…低めで少し乾きやすい
- ・性行為…とにかく優しく！激しい行為は本人が確実に嫌がる！

②三好紗南

ゲームマーアアイドルとして名高い三好紗南だが、18禁ゲームが市場に流通している以上それらのエンカウトは避けられないはずである。プロデューサーの持っていたこの禁ゲームをこっそりやっていたら自分も…という性行為の流れが容易に想起できる。凌辱系のゲームでプロデューサーの性的嗜好を知ったとしても、こっそり攻略しているうちに「あたし自身も該当シーンのように犯してもらいたい」という気持ちが増幅していくのではないかと推察する（あまり度が過ぎたものに関しては流石に拒否反応を見せるだろうが…）。

また、彼女はSRのイラストを中心に胸元や腋が強調されていた事例がある事に加え、プロデューサーに対する立ち位置も恋愛を示唆する形に近い。こうした事例を反映すると、視覚面／性格面でも性的欲求を満たす要素が麗奈や光に比べて高く、性的連想に関しても三人の中で最も行いやすい。故に本人はそれほど意識していなくても、身体に関しては二人よりも少し大人の女性に近づいているのではないかと推察する。したがって、「18歳と言う年齢ではあるが、彼女の膣は麗奈よりも構造や愛液の粘度が大人寄り（と言っても高校生の膣程度ではあるが）になっている事が望ましい。この為、少し背伸びする形で「云々の膣内がゆったりした構造になっているオナホールを捜索すれば、最も彼女の膣に合致したものを迎えできるだろう。愛液に関してても麗奈と対になる形で、粘度が高いものを用いる事を推奨する。」

- ・成熟度…中（やや女子高生寄り）
- ・締め付け…ゆったり（時間をかけるほど膣内への射精量も多くなる）

- ・愛液の粘度…高めでしっとりしたものの
- ・性行為…18禁ゲームを参考に色々…（凌辱系ゲームのような激しい行為でもOK）

このように、私の場合膣内構造は概ね性格やスタイルから着想を得る場合が多い。それでは南条光の場合はどうだろうか。現状では身長も低くかつ本人も女性らしさをあまり意識していない事から、麗奈同様膣内構造は子供寄りのそれに近いものとして考えられる。しかし、本人のスリーサイズに表れているスタイルの良さをそのまま投影すると、成長すればより男性器を受け入れやすい膣への成熟も十分に有り得る。本人がヒーローに憧れてフィジカル関連の特訓をしているならば、締まりもそれ相応にあるだろう。

また、前章①で整理したように、南条光とプロデューサーの関係は相棒である事は重視されている。少年らしい彼女の性格を鑑みると、性行為に関しては教科書レベルの知識しか知らない可能性が高い。それどころか、正義感から性行為に対して何かしらの悪印象を抱いていても全くおかしくはない。しかし、その誤解を氷解するのも相棒たるプロデューサーの役目と言えるだろう。本人と信頼関係をしっかりと築いておけば、「相棒にアタシの運命を託す」と言う形でこれらの障壁を取り除く事も困難ではない筈である。性的関係に至るまでの過程こそ難しいものの、処女喪失以降は紗南と同様に簡単に体を委ねてくれるに違いない。これらの内容を踏まえると、南条光の膣に関しては以下のようなものが想定される。

- ・成熟度…小（将来の成長と共に名器になる余地あり）
- ・締め付け…ややキツめ（麗奈よりは男性器を受け入れやすい）
- ・愛液の粘度…やや低めで滑りが良いもの
- ・性行為…相棒たるプロデューサーに身体を託す形（お互いが気持ちよくなれるような行為である事が望ましい）

こうした要素をオナホールの構造に反映すると、所謂

ロリ系「云々の」に候補を絞る事が相応しい。その中でも少し（麗奈とは異なり、あくまでも少しであるところが重要である）キツめの品をお迎えする事が、最も南条光の膣内に近づく手段として考えられる。

第三章・オナホールをお迎えしよう！

さて、南条光の膣内構造を想起したところで、続いてはそれを再現するために必要なオナホールのお迎えの作法を表記する。

オナホールの愛し方を詳しく分析・例示した研究事例として、しのかつ（2011）がある。これは偉大な先行研究ではあるが、耐久性に関してなど触れられていない側面も多い。また、書籍として上梓されている関係上、「特定のキャラクターに移入してオナホールをお迎えする」と言う行為に関しては明言が避けられていた。「南条光との性行為を実現する」と言う当文書のあるから、原稿の許す限りお迎えの仕方を紹介したい。

①出合いは一期一会

実際の女性と同様に、オナホールにおいても膣穴の狭さや深さ、膣壁への当たり方、締まり具合などは千差万別である。その為、しっかりと自分自身が連想したアイドルの膣内に合致するオナホールを見つけておくことが求められる。前章で行った連想を先に行っておくと、「どのオナホールをお迎え候補にするか」と言う事前調査も容易になる。

オナホールをお迎えする手段としては、実店舗に向かうか通販の二例が挙げられる。前者はメーカーのサンプルで内部構造を確認できる事、後者は誰にもバレない事が利点である。どちらを利用するにせよ、内部構造についてしっかりと確認する事が望ましい。特に人気商品であれば先人のレビューが積み重なっている事から、そのオナホールがどのような構造であるかを確認しやすい。したがって、インターネットで先人たちのレビューを確認しつつ、実店舗やメーカーのホームページを通して、自らの目でそれが本当かを確認してお迎えするオナホールを選ぶのがベストな手段である。なお、オナホールにはアニメ・ゲームのパロディもの

も存在する。残念ながら(?)シンデレラガールズが元ネタらしきものも幾つか存在する。が、これをお迎えするのはお勧めできない。低価格帯(2,000円未満)が多く破損率が高い事も原因として挙げられるが、何よりメーカーが勝手にそのキャラクターの膣内を決めていようというものだ。パッケージ画目当てでお迎えしたとしても、自分の考えていた膣内と全然違うものであったらショックも大きいのは明白である。前章のように各アイドルの膣内や性行為にかけられる時間を速くしながら、自ら決めた膣内をお迎えする。これもまたアイドルプロデュースの発展形であると言えよう。南条光だけでなく、先に挙げた小関麗奈や三好紗南、或いは他のアイドルと乱交をしようとすれば、それぞれに合致した複数種のオナホールをお迎えするとより楽しめる。だからこそ、様々なオナホールのレビューを確認する形で事前調査を行う事を推奨したい。

②非貫通型をお迎えすべし

オナホールの構造は貫通型と非貫通型の二種に分けられる。内容に関しては文字通り「穴が一つか二つか」と言う明確な差異があるが、本格的な性行為に近づける場合、非貫通型をお迎えを推奨する。

非貫通型は膣内が行き止まりになっている為安心して膣内射精を行えるのが特徴である。非貫通型は中価格帯(2,000~3,000円程度)以上のもものが中心となっており、子宮口の再現などにこだわったものも多く、より本格的な性行為を楽しめる。値段もそれ相応の為耐久性に優れたモノも多く、乱暴に取り扱わなければ数年間同じモノで性行為を続けることが可能である。初期投資と持続期間(課金一回分で長い間南条光と性行為が出来る)と考えれば、決して高くはない所作である。

以上の理由から、非貫通型オナホールが担当アイドルとの性行為をするうえで望ましいモノであると言える。それを前提としたうえで、前章や本章の①を参考にしながら最も南条光の膣内に近いと考えられるオナホールをお迎えするのが理想形である。

③愛液たるローションにもこだわろう

性行為の際に膣が濡れていないと挿入できないように、オナホールによる性行為でも潤滑用のローションが必須となる。中価格帯以上のものであればおまけとして数回分のローションが付いてくるが、長く性行為を楽しむならばボトルを同時に購入する事が望ましい。

第二章では各アイドルに対して膣内構造だけでなく愛液についても分析を行った。この分析はローションのボトルを手に入れる際に非常に役立つ。単にローションといえども粘度や成分は種類ごとに異なる。粘度が低いものであれば滑りが良く、高いものであれば水で薄める事により調整がしやすいという利点がある。

なお、前戯からしっかりこだわりたいプロデューサー諸氏もいると思うが、手でほぐすならともかく舐めまわす場合は衛生環境にはしっかりと気を付けて欲しい。ローション自体に有害物質が含まれている事はないが、後述するメンテナンスを怠ると大変な事になりかねない。きちんと綺麗にしてから行為に浸るべきである。

④手を使わずに本格的な性行為をしよう

オナホールは本来自慰の補助を目的とした道具であるから、手を使っても別段問題は無い。しかし、南条光やその他担当アイドルとの性行為を楽しむとすれば、断然手を使わない事にこだわらるべきである。すなわち、オナホールを固定すれば良いのである。具体的手段としては布団やタオルで挟み込むことが挙げられる。布団に関しては厚手であるとオナホールがずれにくいので、そちらを使う事を推奨する。この時布団や毛布の長さを各アイドルの身長に合わせて、身体同士を絡ませた性行為をより再現しやすい。このような準備を整える事で、よりリアルティの高い性行為を行うことが出来る。

通常の自慰と同様に手を使ってオナホールを動かす場合、速度や射精までの時間調整は自分自身の手で委ねられる。しかし、固定した状態であれば文字通り膣内を男性器で突く形となり、よりリアルな性行為を楽しむことが出来る。挿入中にオナホールの上下の向きを変えれば、正常位・後背位と言った体位の変更も容易に再現する事が可能であり、膣壁の感覚の違いをし

っかりと楽しめる。そして何より、射精時にアイドルの子宮に直接精液を注ぎ込む感覚を味わえるのだ。これらの行為はまさに、自慰ではなく真正正銘担当アイドルとの性行為に他ならない。それでいて相手妊娠するリスクはゼロだから、それこそ四六時中ゴム無し生ハメの中出しセックスが可能なのである。「南条光を好きにだけ犯したい」或いは「自分の担当アイドルにいっぱい種付けしたい」と言った性的欲望を持つたプロデューサーにとって、これはまさに理想の手段と言えるだろう。

なお、実際にオナホールを挟み込める抱き枕も存在する為、二次創作で抱き枕カバーが頒布・発売されているアイドルであればよりリアルティの高い性行為を楽しむことが出来る。南条光に関しては未だ抱き枕カバーが存在しないが、将来頒布・発売される事に期待したい。また、上級者であれば所謂エアドールに衣装を着せてそこにオナホールをはめ込むという事例もある。そうだが、こちらは実践したことが無いので割愛する。

⑤メンテナンスは常々行おう

オナホールを長期的に楽しむにあたって、忘れてはならないのは定期的なメンテナンスである。予期せぬ妊娠のリスクが無い為に好きにだけナマの性行為を楽しめるのがオナホールの特徴だが、その後放置すると大変なことになるのは言うまでもない。性病のリスク等を低減する為にも、事後にすぐ洗浄を行うべきである。

また、挿入や洗浄と言った行為全般に関しては、本体を傷めないように優しく行う事が望ましい。幾ら耐久性に優れたオナホールであっても、余りに乱暴な扱いをしてしまえば寿命が縮まる。特に小関麗奈の膣を考察した際に挙げたキツめのオナホールの場合、乱暴に取り扱うと一度挿入しただけで裂け目が入ってしまう事さえある。それでも慎重に取り扱えばお迎えしたのにすぐダメになってしまうような悲劇はほぼ起こり得ないから、「担当アイドルと一緒に気持ちよくなる」「いっぱい満足させてから膣内に射精する」等と思いつながら丁寧に洗浄等のメンテナンスを行うと、ボディ

ソープや石鹸による洗浄が行える為、より女の子らしい香りづけが可能である。「背中を流しあってから二回戦に至る」と言うシチュエーションを含めて楽しみが増える為、是非とも浴室での定期的なメンテナンスを実践してもらいたい。

⑥ 何度も愛し合うのが一番

かくして、オナホールを用いたリアリティの高い性行為の準備は整った。しかし、これは自慰ではなく性行為である。ただ膣内に射精するだけでなく、しっかりと南条光と愛し合う・種付けするといった意識を持つ事が大事である。その上で、この同人誌にある様々な作品が参考資料として大いに役立つのは間違いない。

同人誌内の各作品を見て「この漫画でセックスにかけている時間はどのくらいだろうか」「どのような体位・挿入なら光を早くイかせられるか」などを事前に考えておくと、より南条光との性行為のリアリティは高まる。勿論各ストーリーを再現するだけでなく、自分の脳内で南条光との生セックスや、麗奈や紗南といった他のアイドルを含めた3P・乱交のシナリオを組み立てても構わない。自分が一番射精できそうな性行為のプランを考えたいうえで、それを実行に移すのが至高である。但し、せっかく南条光と性行為をするのだから、彼女自身に早漏と思われないよう心掛けるのも大事である。あまりに気持ち良い場所を突いてしまう事で精液が暴発するリスクこそあるが、しっかり時間をかけて性行為に浸れるよう身体を整えておきたい。そうすれば射精時に膣内に放出する精液の量・濃度も高まり、より長く余韻に浸る事が出来る。喉が渇く、或いは息が荒くなるまで、ゴム無し生ハメの性行為を深く楽しむ事を推奨したい。

加えてオナホールは軟質樹脂で作られている事が多い為、使い込めば使い込むほどより膣内が柔軟になる。その感触からすれば、処女から立派な女性への成長を直感的に楽しめると言っても良い。先に述べた定期的なメンテナンスに関しても、この感触の変化を楽しむために必要な作業であるのだ。「南条光（或いは他の担当アイドル）の膣を自分だけのモノにできる」と

思うと、ワクワクが止まらない読者も沢山いるのではないだろうか。

これらの所作を基礎としてオナホールのお迎えを行えば、南条光を筆頭とする各アイドルとの性行為を実現する事が可能となる。何度も指摘したように、これは最早自慰ではなく性行為に他ならない。したがって、文字通り担当アイドルの膣内で童貞を卒業する事もできるのだ（後述するが私もその一人である）。自らの思考と性欲を張り巡らせたうえで、実際に南条光やその他のアイドルと何度も性行為に浸る事が出来れば幸いである。

おわりに

この文書を寄稿するにあたって、「南条光と18禁二次創作の関連性」を分析する事は最初から決めていた。私自身、南条光担当でありながら性的要素を連想することが出来なかったからである。一方でもう一人の担当アイドルであるToSプロの萩原雪歩に関しては性的欲求が深く、当文章に列挙したオナホールのお迎え・性行為に関しても実際に行っている（勿論、先述した童貞云々に関しても既に彼女に捧げている）。したがって、私自身の現状は「萩原雪歩には性欲が湧き実際にそういった行為もしている一方で、南条光とは相棒でいる事が大事だから性的な連想自体が難しい」と言える。

このような差異は第一章で挙げた南条光の性格に大きな要因があり、「南条光自身が18禁を悪と見なしているのではないか」と私は心の中で思っていた。仮に南条光自身がプロデューサーの隠し持っていたエロ漫画でも見つけようものなら、顔を真っ赤にして激怒するのではないだろうか。だからこそ、この同人誌は私の中の固定観念を崩す意味でも大きく寄与するものであると信じている。

そして、他の南条光、或いはこの同人誌を読んだ他のアイドルの担当で実際に彼女達と性行為を行う上で、この文章が役立つことに関しても少しの期待は寄せたい。執筆時間が足りず多少駆け足となってしまう箇所もあるが、これを機にオナホールのお迎えに興味を持つプロデューサーが一人でもいてくれれば

喜ばしい事である。

—Pixiv「南条光」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag_full&word=%E5%8D%97%E6%9D%A1%E5%85%89

(閲覧日: 2017年2月14日)

2 同「櫻井桃華」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E6%AB%B4%E4%BA%95%E6%A1%83%E8%8F%A1

3 同「佐々木千枝」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E4%BD%90%E3%80%85%E6%9C%A8%E5%8D%83%E6%9E%9D

4 同「向井拓海」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E5%90%91%E4%BA%95%E6%8B%93%E6%B5%B7

5 南条光Wiki「同人アンソロジー」

<http://secsawiki.jp/hikarunanjio/d/%c6%b1%b1%cd%a5%a2%a5%3%a5%bd%a5%ed%a5%b8%a1%bc>

6 熊ジェット『シンデレラガールズ劇場』第640話「技の名前はかっこよく?」2016年1月14日。

7 該当のコマでは他に村松さくらが大石泉の事を挙げているが、これは彼女たちのユニットであるニューウエーブの信頼関係に基づく連想であると推測しここでは除外している。

8 「小さな英雄」南条光 2011年12月28日。

9 「ジャステイスブレイズ」南条光+ 2016年11月16日。

10 「シーフパートナー」有浦柑奈+ 2015年8月25日。

11 露出度の低い「ゲームトークナイト」の特訓後イラストにおいても、しっかりとした乳房を備えている事が確認できる。また、「シンデレラガールズ劇場」336話においても、水着衣装とビキニアーマーを絡めた描写が存在する。

12 複数メーカーより鳥村卯月、渋谷凛、双葉杏、諸星きらり、神崎蘭子、高垣楓と思しきものが発売されている。

13 騎乗位はローションが垂れてしまう事や動作の間

題から、本格的に行うには少し技術がいるものと考えられる。

参考文献・資料

熊ジェット『シンデレラガールズ劇場』第640話「技の名前はかっこよく?」2016年1月14日
同 第336話「いつか着るビキニ?」2014年7月3日
しのかつ『おなほとえっち実践!オナホールの愛し方講座』マックス 2011年

「ライブリージョーカー」小関麗奈 2016年10月31日
「ジャスティスブレイズ」南条光+ 2016年11月16日
「イタズラ☆クイーン」小関麗奈 2015年2月18日
「シーフパートナー」有浦柑奈+ 2015年8月25日
「ゲームトークナイト」三好紗南+ 2014年9月24日
「ピコピコ☆ゲーマー」三好紗南 2013年8月27日
「小さな英雄」南条光 2011年12月28日

Pixiv「南条光」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag_full&word=%E5%8D%97%E6%9D%A1%E5%85%89
(閲覧日:2017年2月14日)

同「櫻井桃華」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E6%AB%BB%E4%BA%95%E6%A1%83%E8%8F%AF

同「佐々木千枝」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E4%BD%90%E3%80%85%E6%9C%A8%E5%8D%83%E6%9E%9D

同「向井拓海」

http://www.pixiv.net/search.php?s_mode=s_tag&word=%E5%90%91%E4%BA%95%E6%8B%93%E6%B5%B7

オナホールの通販ショップONLS

https://www.e-nls.com/disp_ca_hole.php

南条光Wiki「同人アメンロン」

<http://seesaawiki.jp/hikarananjo/d/%c6%b1%bf%cd%a5%a2%a5%f3%a5%bd%a5%ed%a5%b8%a1%bc>

央

最近よく会っている女の子がいる。

はじめはSNSを通じて誘ってみたら意外と簡単に乗ってきた。美味しく頂いて終わりがなと思つたら向こうからのお誘いでまた抱いた。それは、今も続いている。

日曜の朝、あるショッピングモールの地下駐車場がいつもの待ち合わせ場所だ。スマホをいじって待つと助手席の窓をコンコンと叩いてそのまま乗り込んできた。

「待った？」

どれほど楽しみだったのか、はあはあと息を切らせて聞いてきた。そんなに、と返事していつも通り財布を渡す。俺、甘いコーヒーね。

「すぐ買ってくる！」

あの小さい体で非常に元氣よろしく飛び出していく。もう何度目かの流れはお約束のもので、お菓子やジュースを買い込んですぐに駐車場から車を出した。

彼女の名前はヒカルちゃん。十四才のJ.C。小さい体に長い髪、くりくりした目が可愛いと思う。話題はとにかく好きだという特撮のことが多い。

知っていることはそれくらい。

でもそれでいい。深入りするつもりもない。だって彼女は

「あ」

ただの援助交際相手なのだから。

ホテルに連れ込むまでの時間はその日の朝の番組の感想を聞きながら、さわり心地のよい太ももをスリスリ触る。僅かな時間のお楽しみだ。

「まだダメだって」

そう言いながら笑うヒカルちゃんの顔はまだ年相応の中学生っぽかった。

通り沿いにある『そういう事』を気にしない行きつけのラブホの部屋へ入ればすぐにぎゅうっと抱きしめる。一週間ぶりの体だ、我慢なんかするものか。

「もう、気が早っ」

唇を奪う。ちゅ、ちゅ、と感触を楽しむようにしている。ぐい、と体を押された。

「さき、お金」

小柄なヒカルちゃんの手で押されても俺の体は動かないが、ポケットに手をつ突っ込んで用意していた一万円札を、そのまま彼女の手握らせた。

「ありがと」

ニヤリと笑ったように見えたその眼はいつも相手にする援交女のようにだった。

遠慮せずに舌をねじ込む。百四十センチもない小さな体を持ち上げて唾液をたっぷり味わう。

「もう、早すぎだよ。落ち着こうよ」

落ち着けるわけがないだろうに。この娘は自分の価値がわかっているのだろうか、小柄でかわいくて長髪

にして興奮しないわけがないだろう。そのままベッドに連れて行って、ヒカルちゃんを下ろすとそのまま俺はベッドに座り込んだ。

さ、いつものやつて？

「え、これ恥ずかしいんだけど？」
そう言いながらもニヤニヤしながらヒカルちゃんは俺の目の前で服を脱ぎだした。上着を、シャツを、キ

ュロットパンツを順に脱いでいきそして可愛い下着姿になる。
ぶっちゃけたただの趣味だ。セックスのために自分で服を脱ぐストリップを眺めるのだ。これがたまらなく興奮する。最初は若干引き気味だったヒカルちゃんもここ最近俺に見せつけるように服を脱ぐようになってきた。俺みたいなのオッサンが鼻息荒くして自分を見てるのが楽しいのだろうか。その興奮はそのまま股間に出てる。

下着姿の美少女がそこにいた。上下揃いの薄い水色のブラとパンティーにアクセントのリボンが可愛らしい。俺に抱かれるために選んだ下着だ。

とてもかわいいよ。

「えへへ、おじさん以外に見せる人いないんだけど、抱き寄せてキスをした。長い髪の毛やあらわになっ

た肩や背中を愛撫しながらまた口中を味わう。ヒカルちゃんのキスはかなりおとなしめなのでこちらから積極的に攻めていく。彼女の小さな舌をオレの分厚い肉が右へ左へ舐つてやるとソレに反応してちよつと動く。抵抗してるのか、絡めようとしてるのか。

長くてきれいな髪を撫でながら、ブラのホックを外す。ぶっくりと膨らんだ少女の宝物が姿を見せた。女の子の下着を脱がすのは男の特権だ。こんなにちっちゃな体なのにオツパイだけは大きいね、とはじめてのときに褒めたら怒られたことがある。ちっちゃくない、のだそう。よく言うよね、ベッドに座った今のオレと立ったヒカルちゃんの顔の高さは同じくらいだつてのに。

ちゅくちゅくと水音が響く。

今日はどんなセックスがしたい？

「・・・いつも、の」

トロンと眼を蕩かしながらのおねだり。

服を脱ぎベッドに上がる。それに続いたヒカルちゃんは何も言わずとも俺の目の前に膝をついて、目の前のものを凝視する。男のパンツを脱がせるのは女の子の権利だ。

する、と小さな手が伸びて俺のそれを撫でた。さつきから興奮しっぱなしの俺の息子はすでにかなりの力が入っている。それを二度、三度と優しく触り、ぐいとパンツを下ろされた。

そこからはヒカルちゃんに任せる。

ちゅ、ちゅ、と先端に優しく口づけして、そして竿を下から舐めあげる。こつちを見上げるように媚びた視線を向けながら、敏感な部分を責め立てる。このチンポ好きJ.Cはこちらの反応を見ながら楽しんでるのだ。生意気な。

口、開けて。

「・・・んあ・・・」

そんな命令にヒカルちゃんはわざとこちらを見上げ、指で自分の口を開いてみせた。

何も言わずにその穴に思い切りぶち込む。

「ん・・・ごオ・・・」

ヒカルちゃんの小さな顔が、おれの股間に埋まっている。チンポの先を締め上げるキュウキュウとした感触が彼女の喉の動きを伝えてくる。ああ、たまらない。

抱き寄せてキスをした。長い髪の毛やあらわになっ

俺だけの英雄

ひびき

営業から帰ると光が事務所のソファですやすやと眠っていた。

レッスンで疲れたのだろうか。一か月後の単独ライブの為に毎日朝から頑張っているうちひろさんから聞いていた。

最初の頃は毎日付き添っていたが

「アタシは大丈夫だよ！プロデューサーは忙しいから、あたしばかりに構ってられないだろ？だから仕事頑張るよ！」

その言葉に甘えてしまい忙しさにかまけて、最近はなかなか付き添えていなかった。

「光が寂しがっている」という話はちひろさんやほかのアイドルから聞いていた。元気に振舞っているがふっとした瞬間寂しそうな表情をしているらしい。

レッスンは電話で話をしていたが指摘されるまで気が付かなかった。

「ごめん……光……本当は一緒にいてあげたいのに……一人にさせてごめん……」

光の隣に座り、髪の毛を撫でながら語りかけてた。

「うん……あれ？ぶろでゅーさあ……？」

光が眠気眼でこちらを見ていた。

「ああ……ごめんよ。起こしちゃった？」

「大丈夫だよ。プロデューサーこそお仕事大丈夫なの？」

「打ち合わせもひと段落したからね。ほら、これがライブで着る衣装だ。」

カバンからライブの資料を光に渡した。

「すごい！カッコいい！戦隊ヒーローみたいだ！」

嬉しそうに資料を眺めながら目を輝かしていた。

「あのさ……プロデューサー……こうやって直接話すの久しぶりだね。」

「そうだな……ホントはもっとレッスンにも付き合っただけだね……」

「謝らなくてもいいよ！アタシはアタシ！プロデューサーはプロデューサーで今必要な事をやればいいんだ！自分の手の届く範囲でね……でも、ちょっと寂しかったかな……」

「そう言う肩にもたれ掛かって来た。」

光は自分の限界以上に頑張ってしまうことがある。

あまり弱音は吐かないタイプだが今回は少し違ったようだ。相当疲れているようだ。

「光の肩を抱きながら」

「でも明日からは一緒にいられるぞ。本番に向けて頑張るよ。」

抱いた肩をギュッと抱きしめた。

「ホントにプロデューサーと一緒にレッスンも頑張るよ！」

嬉しそうに顔をこちら近づけた……かなり近い。

「光……ちよつと顔近いよ……」

「ご、ごめんなさい！プロデューサー……」

「そういいながらもお互い離れられないでいた。顔を近づけたまま見つめあっていた。光は顔を真っ赤にしていたが俺も同じように赤くなっているのさ。うか顔が火照っていた。」

肩を抱いてそのまま顔を近づけた。光も目を閉じそのまま唇を優しく重ねた。

「ん……」

最初は軽く触れあっていたが徐々に強く吸い付き、舌を侵入させた。

「ん……ちよつ……くちよ……」

夢中で光の口を貪った。光も慣れないながらも必死に俺に舌を入れてきた。

光とこうなる事は初めてではない。レッスンで遅くなり事務所の寮に帰るのが遅くなった時、ちひろさんの許可を取って俺の部屋に泊まった事がある。

最初はヒーロー物のDVDと一緒に見ていたが、夜も遅くなり就寝しようとしていた所、突然光に告白された。最初は驚いたが、俺もプロデューサーを続ける中で光の純真さ、アイドルに対する姿勢に徐々に惹かれていた。アイドルであり、まして14歳の中学生にそんな気を起こしてはならないと必死で気持ちを抑え込んでいたが、お互い両思いである事がわかり、そのま

ま一線を越えてしまった。それ以来何度も肌を重ねていった。

唇を離し、服の上から胸を触る。着やせしているのか、服の上からはわかりにくい、年齢の割にそれなりのモノ持っている。

「いやっ……」

嫌がりながらもこちらを突き放そうとしない。今日も俺を受け入れてくれそうさ。

「もう……ホントに胸好きだね。」

「光のは触り心地がいいからな。いつまでも触ってられるよ。」

「もう……またそんなこと言って……んっ……」

服の上から揉んでいた手を服の中に潜り込ませた。

「駄目じゃないか。下着は付けとけっていつも言ってるだろ？」

「そんなこと言ったって……レッスンの後で着替えた後だから……」

服の上からよりもさらにマシユマロのように柔らかい胸を直接揉みながらも、時々乳首を刺激する。

「うん……ぶ、プロデューサー！そこはだ、ダメだ……いつも言ってるじゃないか！」

「光の反応が楽しいからやめられないのさ。それにヒーローは困ってる人の助けになるんだろ？」

「そ、それはそうなんだけど……というか困ってるのはアタシなんだけど……んっ……」

光が胸に気を取られているあいだに股間の秘部に手を伸ばした。ショーツの上からわかるほど濡れていた。

「ひゃっ……だ、ダメ……ぶ、プロデューサー……」

光の秘部を撫でまわすと次々にあふれ出したもので

すでにビチョビチョになつていた。

「んっ……んっ……じ、事務所でなんて……人が来ちゃうよっ！」

「今日はみんな外回りでいないし、ちひろさんも帰ってくるまで時間があるさ。それに誘ってきたのは光じゃないか……それともここでやめるか？」

「さ、誘つてるなんてそんな……もう……知らないんだから……ひゃあ！」

「ははは。ごめんごめん。俺も光とエッチしたいから。いつものように優しくするからね？」

「はあ……はあ……もう……」

光はいつでも受け入れられるようにあふれ出していた。

そろそろかな……俺はカバンからコンドームを取り出し自身身のモノに装着した。光との初めの時以来いつも常備してある。

「挿れるぞ……」

「あんっ……もっ……ゆっくり……」
いつも自分の部屋でヤツているのとは違う。今はだれも居ないとはいえ、いつ誰かが入ってくるかわからない環境で興奮していたのか、すこし焦りすぎている。

「ご、ごめんよ光……」

「ちよっとびっくりしただけだから……続けて……」

「先ほどとは違いゆっくり根本まで挿し込んだ。」

「んぐっ……はあ……はあ……ぶ、プロデューサー、ぶろでゅーさー……」

お互いの体液が混ざり合つてこすれあういやらしい音を立てながら腰を上下させる。光もそれに合わせて俺を求めてくれていた。

「はあ……はあ……だめ……だめ……もっ……もっ……」

「はあ……はあ……だめ……だめ……もっ……もっ……」

「はあ……はあ……だめ……だめ……もっ……もっ……」

俺たちは同時に絶頂を迎えた。お互い絡み合ったまま、しばらく感触を楽しんでい

「はあ……はあ……プロデューサー……気持ち……よかつたよ……」

「どこで覚えたんだあんな漫画みたいなセリフ……」

「えへ……秘密だよっ！アタシだってヒーロー以外からも色々学んでるんだからね！」

「おいおい大丈夫か？俺以外の前で見るんじゃないぞ。それよりも……みんなが帰ってくる前に掃除しないとな。」

お互いの色々な体液で革製のソファがグチャチャに濡れていた。

「うわあ……早く！みんなが帰ってくる前に片付けな」と！バレたら大変な事になっちゃう！」

「そうだな……こんな事やってるのがばれたらアイドル失格だな。」

少し意地悪気味に言うと

「そうだね……こんな事隠してるのはヒーロー失格だよな……でも、プロデューサーとなら……」

少し複雑な表情をして、顔を真っ赤にしながらうつむいた。

「俺も光とこういうこと出来るのはうれしいよ。どんな事があつても守つて見せるさ。ほら……早く雑巾持つて来て」

「うんっ！ありがと！プロデューサー！」

光はいつもの笑顔に戻つて掃除用具を探しに行つた。

こんな関係がいつまで続くかわからない。でもできるだけ長く……二人だけの秘密の関係を続けていきたい。

みんなのアイドル「南条光」ではなく、俺だけの「英雄」でいて欲しい……光自身もそう思ってくれていると信じていた。

「ほらっ！プロデューサーはそっち拭いて！」

この関係ができるだけ長く続くように願っている。

遅れてきたヒーロー

田宇マグル！

トントン。

麗奈の部屋の扉を二度たたき。静かに鍵を差し込み、時間をかけてゆっくりと開錠する。

隙間に耳を近づけ、額を軽くドアに押しあてたり、リズムカルに足踏みしたりと1分ほど間をあけてからゆっくりと扉に手をかけ、少しだけ扉を開く。

「アタシだ、麗奈。入るぞ」

声をかけた後、最小限だけ扉を開けて光は身体を中へと滑り込ませる。

「電気つけても大丈夫か」

「……」

暗闇の中、奥から聞こえるポソポソとした呟きを肯定と受け取ったのか、手探りで壁のスイッチをつける。

普段の小関麗奈を知るものなら首をかしげてしまうほど整理整頓された室内。だからこそ、ベッドの周囲にだけ散乱する脱ぎ散らした服や飲みかけのベッドポトルが目についてしまう。

ベッドの上で丸くなっていた部屋の主は明かりに反応し、厚手のタオルケットからこっそりと顔を出した。

「ただいま。ご飯はもう食べたってな、夜のおやつにしないか？」

普段通りの光の声に、麗奈は弱々しく頷いた。

「やあ、光」

「プロデューサー！」

短いティータイムを終えて部屋を出た光は、こちらを伺う視線に気づいて、自室へ戻ろうとする歩みを止める。彼女の視線の先にあったのは、廊下の角からこっそりこちらを伺う女子寮の寮母と。

そして彼女達の担当プロデューサーの姿だった。

「お疲れ様っ。今日は早いんだな」

「いや、ちよっと寄っただけだ。もうちよっとしたら事務所に戻って残務整理だな」

自嘲気味に笑う彼の姿に光の表情が曇る。

昼夜の区別のない不健康不摂生な生活は以前と変わらないだろうが、例の事件から二週間。あきらかにその姿はやつれていた。

心配する光の声に便乗するよう。休んでいったらどうかという寮母の申し出をやりわりと断り、

「麗奈の様子はどんな感じだい？」

昨日も一昨日も、そのまた前も。直接会えない日には電話や、時間によつてはメールでも。

どこか光に助けを請うように尋ねる。

「……前に比べたら元気になってるよ。これから二人でお風呂タイムだ」

「そうか……」

わざと明るく振舞う光にプロデューサーの緊張が少し和らいだように見えたが、あいかかわらずその顔は冴えない。

「ごめんなあ。ただでさえ仕事が増えて大変なのに、麗奈の事まで気にかけてくれて」

「気にしないでよ。アタシとプロデューサーと、レイナの仲じゃないか。今はちよっと辛いだろうけど、きつとすぐ戻ってくるさ」

握り締めた左手をドンと胸元に当て、撮影中のように真っ直ぐ相手を見つめる。

レイナを待たせちゃ悪いしまった明日なつ、とわざとらしく会話を遮り、光はその場を後にした。

二週間前。

町中ロケの休憩中、小関麗奈は暴漢に襲われた。

プロデューサー不在の現場でスタッフが忙しくしている最中にふらりと麗奈は姿を消し、次に発見されたのは人気のない路地裏だった。

たまたま同じ事務所のアイドル——光と元看護婦の柳清良に発見された事もあり、この事件は外部やマスコミに漏れる事はなかった。

機密性の高い病院へと搬送され、学校や仕事先では今も彼女は単なる「体調不良の為の休養」扱いになっている。

千川ちひろと繋がりのある警察の極秘部署が調査を続けているが犯人はまだ見つからない。

あの夕暮時、薄暗い路地裏で何があったのか。未だ麗奈は口を閉じたままだった。

「……誰もいないわね。この時間なのに」

「久しぶりの大浴場だからな。ゆっくり使えたほうがいいだろ」

麗奈の名誉の為、事件については事務所の上層部や寮母など管理側の人間の他、発見者の二人、元警察官の片桐早苗など、一部のアイドル以外には伏せられている。

だが自室に閉じこもったままの彼女と、それを咎めようとする大人達。加えて普段一人住まいの清良が暫く泊り込んでいたり、未成年・成人を問わず、単独行動させないようとする周囲の動きに何かを感じ取っているアイドルは少なくないようだった。

「11時前に沙織さん達が帰ってくるみたいだけど、他のみんなはもう入ったみたいだからな。それまではあたしたちだけだぞ」

「残念ね。久しぶりにおどろかしてあげようと思ったのに」

Tシャツを丁寧に折りたたむ光と対照的に、脱いだパジャマを粗雑に籠へと投げ込み、ショーツに手をかけたところで不意に麗奈は背中を向ける。

「どうしたんだ？」

「……フン。何でもないわよ」

背をむけたままバスタオルを身体に巻きつけ、できるだけ裸体を見せないように下着を抜き取る麗奈。普段はやらないその様子を暫し眺め、光は同じようにタオルを撒いたまま服を脱ごうと……

「……ダメだっ、これ腕がツるっ！」

「アンタ下手ねえ」

無理に続けて盛大に転ぶ光の姿に、麗奈はあきれたように静かのため息をつくであった。

「……大体ねえ。みんなオーゲサなの」

二人並んで湯船につかる。

「そうか？」

「そうよ。清良や寮母も。アンタだって、学校や仕事の時以外ずっと一緒じゃない」

「みんなレイナの事心配なんだよ。プロデューサーだって」

「……まあ、アイツにはちよっと悪い事してるとは思ってるわよ」

事件の日以降、麗奈は異性と——あれだけ毎日一緒に過ごしていたプロデューサーとも顔をあわせようとしなくなった。病院の女医や警察の薦めもあってプロデューサーも納得しているようだが、

本人に面とむかって謝る事も慰める事もできない状況は、彼にとつて生き地獄に違いない。

「さっき、アンタが部屋に戻ってるとき、ふと外を見たらアイツがいたわ。こっちは気づいてなかったみたいだけど」

「事務所に戻ってまだ仕事するって言ってたぞ」

「……よくやるわあ」

話が途切れたところで、麗奈が立ち上がる。

すらっとした下肢にタオルが貼り付き、動き辛そうにお湯をかきわける彼女をみていた光だったが、不意に、何気なしにそのタオルの端をつまむ。

「ちよ、ちよっと！」

咄嗟に麗奈が光の手を振りほどこうとするが、動いた勢いでタオルが結び、裸体が露になる。

「——っ！」

身体を隠すよう、湯船の中にかがみこむ麗奈。

あわてて謝る光だったが、顔面を湯面につけたまま頭を覆う彼女の仕草に、思わず息を飲み込んだ。

息が続かなくなったのか。無言で湯船に漂うタオルを手に取り、のそのそと外へと出て行く麗奈の腕を、

光は今度は自らの意思でしっかり掴んだ。

「……何よ。のぼせそうなんだけど」

麗奈の言い分を無視して自らも立ち上がると、光は

背後から一回りおおきな麗奈を抱きしめる。

「……それで慰めのつもり？」

「ああ」

麗奈の手からタオルが落ちる。

伸ばした光の指が左顎から顎、唇、鼻となぞり、少女の尻に溜まった平をぬぐっていく。

「気にするな、なんて簡単にいえないけどアタシは早くレイナに元気になってほしいぞ。一緒に仕事したり、遊んだりしたいしな」

「……もうアタシなんかほっといてよ」

「断る。レイナは親友だからな」

ジャブジャブと湯船の中を移動し、光は麗奈の正面へ立つ。

長い髪が張り付いた華奢な肩を光の手が掴む。

長く風呂につかっていたからか、手足から膨らみかけの乳房まで火照り、赤みの差す身体を今度は隠そうとせず、かわりに顔を伏せる麗奈。

「……汚くない？」

寒いからではない。

震える声でそう問いかける彼女を前に、光はあの日の出来事を思い出す。

「ちよっと、何なのよっ？！」

唐突に。

路地裏に押しこまれた麗奈は身体を壁に押し付けられ、身動きがとれないまま早々に唇を奪われる。

目を白黒させ、振りほどこうとするが、倍近い体重差のある男を相手に、幼い13歳の少女の抵抗は意味をなさない。

アイドルの唇を味わった男はやがて汚れた手で麗奈の口を塞ぐと、耳元で安直な脅し文句を吐く。

その剣幕に声もだせない彼女の服の下へもう片方の腕を突っ込み、遠慮なくブラの上から胸を鷲掴むと、

押さえられた口端から悲鳴が漏れた。

少女の拒絶を意に介さず、男の掌が直接乳房に触れ、

自分本意に弄ぶが、やがてその煩雑さが気になったのか。小さな体をさらに縮みこませて身を守ろうとする

麗奈を無理やり地面に押し倒し、苦悶の声をあげる彼女に構わずシャツをめぐりあげると、力任せにブラジャーを引きちぎる。

普段は外気に触れることのない未開の萌芽に、男は

勢いよく首をたてて貪りついた。

「い、嫌あ……」

背筋に走る悪寒に身体を震わせ、心からの嫌悪を口にする麗奈だったが、次の瞬間、それは声にならない

悲鳴へとかわった。

男の手が麗奈の下半身へと伸びる。ショートパンツのボタンをばちんと外し、下着ごと抜き取るうとする

その行為の意味を理解し、文字通り必死に麗奈は抗うが、やがて抵抗をなく服を剥ぎ取られ、少女の下半身があらわになる。

もはや抗議の声をあげる事もできず、顔を涙や鼻水でぐしゃぐしゃにしたまま、這って逃げようとする麗奈。そんな彼女を男は無慈悲にも仰向けにおさえつけて

自分もズボンを下ろすと、グロテスクに屹立したベニス少女の秘所に押し当て、体重をかけて一気に貫いた。

恐怖。ショック。絶望。

「ちよっと、何なのよっ？！」

「ちよ、ちよっと！」

「……よくやるわあ」

話が途切れたところで、麗奈が立ち上がる。

すらっとした下肢にタオルが貼り付き、動き辛そうにお湯をかきわける彼女をみていた光だったが、不意に、何気なしにそのタオルの端をつまむ。

「ちよ、ちよっと！」

「……よくやるわあ」

話が途切れたところで、麗奈が立ち上がる。

すらっとした下肢にタオルが貼り付き、動き辛そうにお湯をかきわける彼女をみていた光だったが、不意に、何気なしにそのタオルの端をつまむ。

「ちよ、ちよっと！」

「……よくやるわあ」

話が途切れたところで、麗奈が立ち上がる。

すらっとした下肢にタオルが貼り付き、動き辛そうにお湯をかきわける彼女をみていた光だったが、不意に、何気なしにそのタオルの端をつまむ。

「ちよ、ちよっと！」

「……よくやるわあ」

話が途切れたところで、麗奈が立ち上がる。

すらっとした下肢にタオルが貼り付き、動き辛そうにお湯をかきわける彼女をみていた光だったが、不意に、何気なしにそのタオルの端をつまむ。

「ちよ、ちよっと！」

「……よくやるわあ」

ほんの十数分前まで想像だにしない展開への動揺に、未成熟な身体への無理矢理な挿入で生じたかつてない痛み。

虚空を見つめたまま、時折無意識に呻き声を漏らす麗奈を尻目にピストンを繰り返す男。

そのストロークはしだいに短く、早くなつていき、獣のような低い唸り声とともに最奥に入れたまま男の動きが止まる。

赤と白に染まる少女のヴァギナから萎んだ一物を引き抜き、ピクリともうごかない麗奈の手にむりやりこすりつけて汚れをふき取ろうと試みる。

最後に尿道に残っていた精液で少女の身体を汚し、満足したように男は文字通り姿を消し――

――そして。

一連の行為を物陰から見ていた南条光はゆっくりと立ち上がる。

自らの愛液で湿った指先をズボンで拭い、羽織っていたジャケットを麗奈の身体にかけると、電話帳に登録された清良の電話番号をブッシュした。

幼い頃から憧れた正義のヒーロー。

善良な子供達や仲間とのピンチに颯爽とあらわれ、格好よく悪漢を倒して去っていく――

いつだろう。

『もし仲間の危機にヒーローが現れなかったら』なんて想像してしまったのは。

ヒーローを志す自分と、守ってあげたいと思える事務所の仲間――憎まれ口を叩きながら、いつも傍にいる親友のことを意識してしまったのは。

ヒーローに憧れた少女が、悪を生み出す力に目覚めたのは、それから間もなくの事だった。

「……いくぞ」

風呂場を後にし、二人して麗奈の部屋に入る。

しつかりと鍵をかけ、カーテンを閉じた密室で光はゆっくりと、眼前の麗奈に見せ付けるように下着を脱いでゆく。

「……アンタやっぱりおつきいわねえ」

「あ、あんまり見ないでくれないか」

「言い出したのはそっちでしょうが」

脱いだ下着を畳んでベッドの脇におくと、光は傍らの麗奈のブラジャーに手をかける。

「他人のブラ外すのって、なんだか緊張するな」

「それに慣れてたらこっちは驚きよ」

一瞬、光の頭に事務所の登山愛好家がよぎるが、強引に邪念をふりはらう。

なんとか上を取り、ベッドに座った麗奈の腰に手をやると彼女に言われた通り、目をそむけたままショーツを脱がせていく。

そろって一糸纏わぬ姿となった二人は、自然と手を重ね、ベットの向かい合った。

「……それじゃあ、いくぞ」

「……うん」

レイナもアタシも、同じだ。

あの時「汚れてしまった」と呟く麗奈に、

光はそう答えた。

麗奈の膝に手をやり、ゆっくりと開いていく。

架空の悪役に犯された跡はほとんど見られず、少女らしい薄い陰毛の下のクレヴァスはピツタリ閉じている。顔を赤く染め明後日の方向を向いてぶるぶると震える麗奈の太ももに這わせようとするが、指を当てた瞬間、かわいらしい嬌声をあげて麗奈はその脚を閉じてしまう。

「こ、交代っ！ 今度はこっちの……レイナサマの番よ、覚悟なさい」

照れ隠しのように声を荒げ、光をベッドに押し倒す麗奈。その手が無遠慮に胸の先端へと伸び、小さな声

とともにピクンと反応する光の様子に、いつものイタズラっぽい笑みがようやく浮かぶ。

やがて無垢な少女の指が自らの陰部にたどり着き、湿っているその意味に彼女が気づいたら

万にひとつ、事件の首謀者が自分だと気づかれ、彼女がその理由を知ってしまったら――

そんな光の考えなどどこ吹く風と、おへそを弄んでいた麗奈の指がしだいに花園へと降りていく。

薄暗い灯りの下、歪な雫がたらりと零れ落ちた。

――了――

ヒーローになれなかった少女

雑魚P(@kurobutam78a)

これは、一人の少女がアイドル《ヒーロー》になれなかったかもしれない物語

「ヒーローショー…」

少女はデパートの壁に貼られたヒーローショーのポスターを見てため息を吐いた。
見た目が年不相応に幼いが二歳、周りからヒーロー好きの趣味を馬鹿にされ、地元から少し離れたデパートのヒーローショーを見るのも億劫なのである。

「ここなら…クラスの誰かに見られることはないけど、やめとこう」

少女はため息を吐いて踵を返すとスーツの男性とぶつかる。

「ああっ！ごめん！！」

「…大丈夫かい？」

「う、うん…」

気をつけなよ、と男は言い残してその場を去り、少女もデパートから帰ろうと歩き始めた。

そんな時、少女は見てしまう、気弱そうな男子生徒が見るからに柄が悪い男達に絡まれている所を

（どうしよう…皆見てるけど、助けようとしたくない、アタシがとめなきゃ…！！）

何かに取り憑かれたかのように少女は間に割って入り声をあげると気弱そうな男子はそのまま逃げ去り、ガラが悪い男達はお互い見て笑いながらその場を離れた。

（なんだろう、あっさり何とかなったけど、嫌な予感

がする）

少女はデパートを暫く見て回り家の帰路をついた。

（はあ、何してるんだろうアタシ、ヒーローショーを観にわざわざここまで来たのに）

ため息を吐いた瞬間、横に車が止まった。

「…？」

「あーごめん、この店知らない？」

「えっと、この雑貨屋ならこのまままっすぐ」

車に乗った男がニヤリと笑った瞬間、少女は後ろから何かに覆われ、咄嗟にもがくが少しづつ力が抜けていき、少女は薄れゆく意識の中で見たのはデパートで会った柄の悪い男達だった。

◇

町から離れた廃墟に少女の悲鳴が響く

「まったくよ、邪魔しやがって」

男は全裸で縛られた少女の乳房を強く握り、仲間の男達はゲスな笑いを浮かべながら写真を撮りながら男に指示をする。

「股開かせろ股」

「よっしや」

「い、嫌だっ、やめろ！！」

「ほらよっ」

男は無理やり足を広げさせ、そのまま抱き上げた。

仲間達は笑いながら更に写真を撮る。恐怖と羞恥に少女は泣き出すが男達は辱めることをやめず、一人の男が玩具を取り出す。

「それどうしたんだよ」

「兄貴のパチって来た、色んなもの持って来てっから」

「じゃ、まずはローターで遊ぶか」

「うう…もうやだあ…」

男はローターの電気をつけ、少女の膣口に当てた。

「つつつつつつ…！！！！！！」

「はははっ、すげえ反応だな」

少女は今までに感じたことのない感覚が全身に走りびくんと跳ねた。

ぴりぴりと痺れのような物、男達はさらにローターを少女の膣口や乳首に当てた。

「やああああ！！！！」

「暴れんな暴れんな、おい、テープ」

男達はローターをテープで固定した。

「やあ…っ、なにこれえっ！！」

「こいつオナニーもした事がないのか」

「ははっ、よかったな、このまま大人の階段登らせてやるよ」

「最初誰するよ」

「誰だっていいだろ、どうせ今日中は楽しむ予定だし」

「じゃ、俺いくわ、ちょっと降ろしてくれ」

男はズボンを脱いでパンツを降ろしてペニスを出すと少女は怯えた表情でソレを見た。

「ひっ」

「口開ける」

「い、嫌だっ！！」

「嫌じゃねえよ！！」

「ぐぐぐっ！！」

少女は口内を犯す異物に吐き気を催す。

身体が動くのなら払いのけるほどの嫌悪感、しかし身体は縛られ男に頭を掴まれて逃げようもなくされるがまま少女は口を玩具のように扱われた。

「おっ、濡れて来たからそろそろいれろよ」

「おう」

「げほっ！げほっ！！」

「ほら見るよ」

「ひっ！！？」

男はペニスを少女の目の前に突き出した。

「これからコレが光ちゃんの膣内に入るんだぞ」

「な、なんでアタシの名前を、っ！」

男はペニスを少女、南条光の顔を擦りながら話した。

「いやな、ツレの妹がお前と同じクラスでな、よく聞かされたんだよ『中途半端なヒーロー気取りのチビがウザい』ってな」

「そ、そんな……」

「○○○中学校の南条光ちゃん、ほらこれ名札」

「どうしてそれをっ！」

「失くしてたんだろ？俺の妹が盗んでたのさ」

「っ！！！」

「じゃ、挿入れようかな……」

「……んで……」

「あ？」

「何でアタシがこんな目にあわなきゃダメなんだ！？ただヒーローが好きだけなのに！ヒーロー好きでおかしいのか！？ヒーローに憧れて何か悪いのっあ。あ。あ。あ。……！！！！？」

光は叫ぶが遮るように男はペニスを光のマンコに挿入し、その光景を見て残りの男達は嘲笑しながら動画を撮る。

「うるさいから誰か口塞げ」
「じゃあ俺口に入れるわ」

もう一人の男が光の顔にペニスを擦り付け、その光景を動画に撮り、光に見せつける。

「可哀想になあ、こんな可愛い顔に汚い物を擦られて

「ぐぐっ！！あ、あ、っ！！！！」

「よっしやあ、いくぞ」

「ぐぐぐぐっ！！？」

◇
何度目かわからない射精、膣もアナルも二人を超え、男達に変わる変わる犯されていた。悲鳴混じりだった嬌声から悲鳴がなくなり、快楽に逆らえなくなっていた。

「あんっ、奥にい、っ！そ、そこダメ……っ！！！！またイグウウウウウ！！」

「っふう、何発出しても飽きないな」

男が光の腹を踏む

「ああ、っん！！」

「すっかり抵抗しなくなったな」

別の男が光の乳首を抓る

「ふあああああああああ！！！！」

「ふーん、じゃ、墮とそっか」

男は他の男達を離れさせ、光を優しくもたれかけさせて耳元で囁く

「辛かったよなあ光ちゃん、自分の好きなこと否定されて、ずっと馬鹿にされて……今もこうやって酷いことされてさ」

「あっ……」

「こうやってえ、乳首弄られるの好き？」

男は乳首を強く抓ったり、指で弾いたりして執拗に責める。

「……そんな、気持ちよく、なんか」

男は今までより強く抓った。

「やあっ！！！！気持ちいい、気持ちいいよ！！！！」

「光ちゃん、好きなものはな、好きなままでもいいんだ……ただ好きなものを変えよう」

「好きな、事を変えるっ……？」

「そう、光ちゃんはヒーローが好き、だけどヒーローはおろか警察だってまだ助けに来ない、酷いよね、光ちゃんはあるに好きなのに」

「助けに、来ない……」

「でもね、こうやってエッチな事だと、皆馬鹿にしな

「……えっちなこと」

「皆えっちなことをしてる光ちゃんを否定しない、光ちゃんを見る」

「そうだ……皆、アタシとえっちな事をして、嬉しそうだ……！！」

「でしよ？だからね」

男は光の前で横になる。

「まだヒーローが好きならこのまま帰っていいよ、ちやんと僕達も警察に行く……だけど、ヒーローを卒業して、えっちな方が好きで皆とえっちな事をするなら、僕のペニスをに入れて」

周りの男達は何も言わず、ニヤニヤしながら光を見る

（ヒーローが好きでも、どうせ皆馬鹿にするんだ……アタシがこんな酷い目にあってるのに、ヒーローは助けに来ない、皆はヒーローのアタシを求めないけど、えっちなアタシを求めてるんだ……！！！！）

光はよろよろと立ち上がり、男に跨ると男は光に囁く

と光は顔を赤らめながら自ら臆を広げた。

「アタシ、南条光はヒーローを卒業しますっ！みんなの肉便器として生きますっ！！知らない人にレイプされてよろこぶえっちなアタシに沢山えっちなことをしてください！！！」

男はニヤリと笑うと、光は自ら腰を下ろしてペニスを受け入れた。
今までと打って変わって激しく腰を振ると他の男達もペニスを光に向けると光は手にとりシゴいたりフェラをする。

「光ちゃん、俺光ちゃんのお尻でやりたいな」

「いいよっ、好きなだけアタシのお尻におちんちん入れて」

男達の行為を受け入れた光は、何度も何度も犯されていった。



「あへえ：おちんちんほいっばい」

「お疲れ様光ちゃん、光ちゃんはえっちな事好き？」

「大好きい：えっちなことすきい」

「ヒーローよりも？」

「ヒーローよりもえっちなことがいい！！！」

「じゃあ、光ちゃんは肉便器になつてくれるんだね？」

「うん：肉便器になる：」

「これ、わかる？」

「アタシの名札：？」

「これを光ちゃんの乳首にプスつとさして、ネットのお友達に公開して、いろんな人にえっちな事してもらおっか？」

「：うん！！！」

男は光の乳首に名札の安全ピンを刺した。

「アタシは南条光、えっと：17歳、えっちな事が大好きな（？）だよ！口もオマンコもアナルも大好き！一番好きなのはこれ見て、肉便器としての名札と優しいお兄さんがアタシにくれた乳首ピアス、ここを弄られるの好きなんだ：！！これを見た皆はアタシを見つけたら声をかけてくれよな！アタシは皆の肉便器だから喜んでセックスするよ！だから皆、アタシを早く犯しに来てくれよ！！！」

卯月由羽

きつかけは単純。

最近使い方を覚えたばかりのスマホで、これまた覚えただけの検索サイトを見ていたときだった。

そこでキーワードで画像を検索できることを知った。アタシは、さっそく「幽体離脱フルポッコちゃん」と入力して、検索。

そうすると、たくさんのキャプチャー画像に混じって、多くのイラストで画面が溢れ返る。「イラスト」と言葉で画面が一杯になった。これだけたくさん麗奈が可愛く描かれているというのに、なんだか誇らしい気持ちになった。一覧で表示されているイラストをスクロールしていると、ある一枚の絵が目にとまった。フルポッコちゃんが、怪人にやられている絵。怪人に負け、衣装を剥ぎ取られ……そして、辱められている。

思わず目を覆った。見てはいけないものを見てしまった気がした。それでも、好奇心には勝てない。恐る恐る指の間を広げ、画面に視線を戻す。

フルポッコちゃんは、レイナは……たくさんの怪人の手に取り囲まれ、よってたかって衣装を剥がれ、その手で体のあちこちを弄られ、そして……大切なところをめちゃくちゃにされていた。

これはただの絵、の、はずなのに。アタシはもう画面から目を離せなかった。今、アタシはとても悪いことをしている。それくらいは自分でもわかっていた。レイナが酷い目にあっているのに、なぜかすごく身体が熱い。画面のレイナの触られているところに、そっと指を伸ばして自分でも触れてみる。ぞくっ、とした。そして、それが妙に気持ちよかった。少し怖いけれど、知りたい気持ちのほうが強くて。身体のいろんなところをまさぐってみる。

「あっ……！」

ヘンな声が漏れる。指が止まらない。体を寝かせて

下着をおろして、中指を伸ばして。柔らかいところをくにくくと弄る。指を往復させるたび、ほんのりと熱さと気持ちよさが、体を包む。レイナも、こんな声を上げたりするんだろうか。そんなふうに見える。余計に興奮してきて、もう指が止まらない。息も、だんだん荒くなってくる。

「……あ、れ」

指先に、ぬるりとした何かがついていた。指を離してみると、糸を引いている。そのぬるぬるを滑らせて、もつと擦ってみる。それがますます気持ちよくなって、夢中で指を動かしてしまふ。そのうち、少し固くなるところに当たって、身体がこわばる。だんだん息も荒くなってきた。気がつけば夢中で擦り続けていた。

「あっ、あっ……！」

声が漏れるのも、自分の部屋だから気にせずに。想像の中でも、レイナをたたくさん苛めていた。

「なにすんのお、やめなさいよ……っ」

頭のなかで、レイナの音が響く。それでも、無理やりいやらしいことをされるレイナの姿を思い浮かべると、指が止まらない。アタシのこの指が自分のここを弄っているのか、それともレイナのを弄っているのか、錯覚してしまふ。指の動きも単純な往復から、くるくる回すような動きに変化をつけたりして。アタシの指の動きと連動するように想像の中のレイナの大事なところを弄っていた。

「やだ、やめて、やめてよ……」

すっかり弱気なレイナの声が聞こえてきたような気がする。それでもその泣き顔に、どうしてかアタシは興奮していた。今ももう、とにかくどうやら気持ちよくなれるか、それだけが頭にあった。身体に流れる電流のようなものが、頭にまで流れ込んでくる。何も考えられなくなっていく。気がつけば、ただただレイナの名前を呼んで。そして、どんどん頭が白くなっていく。

そして、その中に、火花が散った。

その一瞬の後に、体の力が抜ける。

床に、ぐったりと倒れ込む。

ひとしきり熱が冷めてから、アタシの胸の中には黒いもやもやがあった。いやらしい絵のレイナに興奮して、想像の中でもレイナにひどいことをしてしまっただらうか。

……でも、それなのに、あのレイナの顔が頭に焼き付いて離れない。そしてそれを思い浮かべるたび、また胸が締め付けられて、同時にどきどきした。

どうしよう、これじゃ、ヒーロー失格だ。いや、それより。レイナに悪いことをしてしまった。

Hの素顔—そしてアイドルはいなくなる

モンドP

朝の女子寮、自室の中。

南条「ごめん…なさいっ、ごめんなさい…」

アタシは泣きじゃくりながら、ただひたすら謝罪の言葉を繰り返す。

P「大丈夫、俺はちゃんと聞いてやるから。落ち着いて、ゆっくり話せ。な？」

Pさんが優しくなだめてくれる。でも、今のアタシには優しくしてもらう資格なんて無い。

南条「アタシ…アタシ、ヒーローアイドル失格なんだっ…」

事の始まりは1週間くらい前。

南条「おはようございます！」

その日、アタシはいつものように事務所を訪れた。Pさんは他のアイドルの人たちのライブに付き添うために出張中。アタシも早く追いつかなくちゃな!

南条(えっ)と今日の予定は、2時からポーカーレッスンで…

「光ちゃん、おっはよー☆」

南条「あっ、莉嘉ちゃん!おはよう!」

ホワイトボードを見て予定を確認していると、部屋の奥から城ヶ崎莉嘉ちゃんが声をかけてきた。見れば机に重ねた雑誌を読んでいる最中だったらしい。

南条「それは…フアッション誌?」

莉嘉「そーだよ。おねーちゃんの持ってるやつ、ちょっと借りてるんだー☆」

南条(フアッション…フアッションかあ)

今アタシが着ている服は、どれもお母さんを選んでもらったもの。今まではそれで良かったのかもしれない。だけど、今のアタシは皆から憧れられるアイドルなんだ。こういったことも、もつと真剣に向き合わなきゃいけないんだ。

南条「なあ莉嘉ちゃん、その雑誌アタシも一緒に読んでいいかな?」

莉嘉「勿論!光ちゃんもこういうの興味あるんだねっ☆」

南条「うん、アタシももつと色々勉強しないといけないって思ってたさ」

荷物を下ろし、莉嘉ちゃんの隣に腰掛ける。積まれた雑誌はまるで城塞のように見えるが、怖気づいてる場合じゃない。

南条(美嘉さん、莉嘉ちゃん!カリスマの力、お借りします!)

決意を固め、アタシはおもむろに一冊の雑誌を手にとった。

…それから10分後。アタシは雑誌とにらめっこしながら、頭から湯気が噴き出すのを感じていた。

南条(モード…属性…:う…ヒーローのフォームチェンジとは違うのか?)

カラフルな紙面に踊る文字が理解できず、アタシはひたすらに目を白黒させることしかできない。

莉嘉「あつ見て見て光ちゃん!このバンク系のフアッションなんかイケてる感じしない?」

南条(ゴシックバンク…なんだか怪人の名前みたいだな…じゃなくて!)

読み進めるたびに聞いたこともないような単語が押し寄せてくる。こんなことなら、もつと早くから勉強しておくべきだったか。そんな後悔に苛まれたつとも読み進めていると、

莉嘉「えーつと、次は…なつ、何これえ!」

南条「どうした莉嘉ちゃん!」

突如莉嘉ちゃんの悲鳴が上がる。何事かと思つてそちらを見ると、莉嘉ちゃんの持っている雑誌の中身で

女の人が、自分で、自分の胸を、弄つて

南条(…う…う…う…)

余りの衝撃に思わず莉嘉ちゃんと顔を見合わせる。莉嘉ちゃんも信じられない、といった風に顔を赤くしていた。…多分、アタシも同じ表情をしているのだろう。

南条「えっ…えっ、今のつて、いや、でも」

見間違いないかを確認するためか、それとも怖いもの見たさか。一度深呼吸をして心を静め、意を決し

してゆっくりとページに視線を戻す。

莉嘉「うわー!」

そこに映っていたのは見間違ひではなく、気持ちよさそうに自分の胸を弄る女性。見ているだけで顔が熱くなってくるのを感じてしまう。

南条(…う…ええ保険の授業で習った、ような…)

自慰行為、だったっけ。よく覚えてないが、そんな話があった、気がする。うん、今度からはもつと授業を真面目に聞くようにしよう。決意を新たにしつつ、もう一度莉嘉ちゃんと視線を交わす。

南条「ど、どうしよう、これ…」

莉嘉「…折角だし、読んでみない?」

まさかの提案に、思わず瞬きの回数が増える。

南条「えっ、ちょ、何言つて…」

莉嘉「だつてこれも、多分おねーちゃんが読んでる本でしょ。おねーちゃんに追いつくためには、同じもの

確かに、莉嘉ちゃんが言う通り。カリスマアイドルの最先端に行く美嘉さんに追いつくには、同じくらい努力して、勉強する必要がある。だけど、

南条「でもその本、アタシ達が読んじゃいけないやつじゃ…」

そう。その本の表紙には、右下に15禁を示すマークがついている。アタシはまだ14歳だし、莉嘉ちゃんなんて12歳だ。流星にこれを読むわけにはいかな

い。

南条「それは後で美嘉さんに返すとして、他のやつを

読もう、な?」

莉嘉「む…光ちゃんは気にならないわけ?」

南条「アタシは、別に…」

莉嘉「うっそだー!さっきからチラチラ見てるくせに!」

痛いところを突かれてたじろぐアタシに、容赦のない追い打ちが加えられる。

莉嘉「ヒーローなのに嘘つくなんて、そんなの良くないくない?」

南条「うっ!」

嘘をついてごまかすのも良くないことで。しかし。いや。それでも。

莉嘉「ほら、光ちゃんも一緒に読もう。大丈夫、ちょっとくらいヘーキヘーキ☆」

南条「あっ、アタシは……」

莉嘉「うわっ、これなんか凄くない!？」

南条「っそ、そうだな……」

結局、自分の中の好奇心に打ち勝てず、アタシは莉嘉ちゃんと一緒に例の本を読んでいる。つくづく自分の意志の弱さが情けないが、今はもうそれどころではなかった。

より気持ちよく楽しむには。正しい胸の弄り方。股を刺激するのに最適なのは。見ちゃいけないものを見ているのに、目をそらすどころか食い入るように読み込んでしまう。

南条(これって……でも……)

読むほどに、体の中に正体不明のモヤモヤした感触が宿る。お腹の下あたりがムズムズして、気持ち悪くて仕方がない。

莉嘉「おねーちゃん、こんな事も勉強してたのか……」

後で色々聞いてみよつと☆

南条「莉嘉ちゃん、それはやめた方が……」

一方の莉嘉ちゃんは興味津々といった感じで雑誌を読み込んでいる。……恥ずかしくないんだらうか?

南条「や、やっぱりマズいよ。ほら、早く戻そう?」

莉嘉「えーっ、もうちよつとくらいイイじゃん! だいいょーぶ、バレないバレない!」

「へえー、バレなきゃ大丈夫ってワケ?」

南条「うえっ!？」

雑誌に夢中になるあまり、まったく気づけなかった。後ろから突然声が出て、アタシ達は慌てて振り返る。莉嘉「あっ、お姉ちゃん……」

美嘉「莉嘉、アタシまた人の雑誌勝手に持ち出したわね!」

声をかけてきたのはまさに件の雑誌の持ち主である城ヶ崎美嘉さん。勝手に雑誌を持ちだされた上に読み荒らされれば、怒るのも無理はない。……というか、勝手に持って来てたのか、この雑誌。

美嘉「それに! この本は莉嘉達が読んじやダメなやつでしょ! まったくもう!」

南条「ご、ごめんなさい美嘉さん! 勝手に読んじやったりしちゃうって!」

美嘉「あー、光ちゃんゴメンね、うちの妹が迷惑かけちゃうって」

莉嘉「おねーちゃん! ? 光ちゃんだけ特別扱いなんてずるくない!？」

莉嘉ちゃんという点では、アタシだって同罪だ。

南条「そ、そうだ! 叱るなら莉嘉ちゃんだけじゃなくてアタシも!」

美嘉「光ちゃんほちゃんと反省してるから、これ以上言ってもしょうがないでしょ? ま、次からは気をつけなきゃダメだよ★」

莉嘉「えっ、アタシも反省して」

美嘉「アタシは何回言っても雑誌の持ち出しをやめないで! 今日という今日はたっぷり説教するんだからね!」

そう言って美嘉さんは莉嘉ちゃんを連れて会議室の方へと向かっていった。勢いに押され、アタシはその様子を見かねて見ていた。……雑誌、片付けられないのか?

南条「……あつけない、レッスンの支度!」

時計を見れば、そろそろ出なければいけない所まで針が移動していた。雑誌から受けた衝撃を忘れようと慌ただしく準備をしたけど、感じていたモヤモヤは拭い切れずにいた。

その日の夜。

レッスンを終えたアタシは寮に戻ると、夕ご飯も早々に自室に戻っていた。

南条(うー……)

頭の中を駆け巡るのは、昼間に見た雑誌の内容。レッスンの間もご飯の時も、ずっとちらついて一向に離れようとしてくれない。

南条(えっちなこと……なんだよね)

そわそわと、ベッドの上で寝返りを打つ。こんな事ばかり考えるのは良くない。そう自分に言い聞かせているのに、どうしても考えることをやめられない。

南条(……したくないけど、気持ちいい、のかな)

体の中のモヤモヤした感覚が気持ち悪い。自慰をすれば、この感覚が晴れるのだろうか。……誰のかがかかった思考は段々と理性の反対側に転がっていき、

南条(一回だけ……そう、一回試すだけなら)

遂に、アタシは自慰を選択してしまった。

一度決断を下すと、行動に移すのはあっという間。誰にも見られないようにするため、自室のトイレに移動すると鍵をかけ、無意味に周りを見渡す。

南条(……よし)

もう後戻りはできない。覚悟を決めて、アタシは服を脱ぎ、下着姿になって便座に腰を下ろした。

南条(えっ……まずどうするんだっけ……)

決心したのはいいものの、やり方はよくわからない。……誰か読んで雑誌の内容を思い返す。

南条(確か……胸をこう……)

アタシの胸。周りのみんなに比べると筋肉が多い分あまり膨らんではいない部位に手を添えてゆっくと掴み、普段愛海にされているように揉んでみる。

南条(……ん……)

指から伝わってくるのは、スポーツブラ越しの柔らかい感触。くすぐったいような気分にはなるが、気持ちいいというのとはちよつと違う気がする。

南条(やり方が違うのかな……)

触り方がよくないのだろうか。そう考え、揉む動作からこねる動作へと手の動かし方を変えてみる。すると

南条「あっ……んっ」

びりり、と。頭の中に弱い電流が走るような感覚がする。未知の体験に思わず声が漏れてしまい、慌てて手を止めて周りの様子をうかがう。

南条(ばれてない……よね)

四方を壁と扉に囲まれているのだから確認なんてできなわけがない。それでも怯えるように耳を澄ませ、変わった様子がないことを確かめると、再び胸を弄り始める。

南条(んっ……なんだろ、これ……)

円を描くように。撫でまわすように。アタシの手が胸の上で動くたびに、チリリと焼けつくような、それでいて痺れるような感覚が体の中を駆け回る。

南条(なんだか…ピリピリする…)

まるで自分の体が自分の物じゃなくなつたかのように、この感覚が得られるところを探して手が動き回る。これが気持ちいい、という事なんだろうか？考える間もなく、追い打ちが加えられる。

南条(っんっん)

手のひらが胸の中央をこねた瞬間、今まで以上に強い衝撃が体を貫く。足が震えて、力が抜けていくのを感じる。もし立ったまましていたら、きっと体を支えられずに倒れていただろう。

南条(なっ…に、今の…)

驚いて胸を見やれば、ブラ越しにも分かるほどに乳首がぶつくりと膨らんでいた。恐らく発生源はこれだろう。衝撃に打たれて体が浮くような感覚が忘れられず、指で乳首をつまみ上げる。

南条(あっ…これ…)

コリコリと、押しつぶすように指で弄ぶ。それだけで頭に電流が送られ、思考が霧散する。この感覚を味わっていたい、もっと気持ちよくなりたい。そんなことしか考えられなくなる。貪るように指を動かしている

南条(股…濡れて…)

用を足すための部分。パンツにしつとりと染みが出来ていた。右手で胸を弄りつつ左の指でそつと触ると、くちゅ、と音を立ててひんやりした感触を返してくる

南条(おしっこじゃない…)

その正体を探るため、指で股を軽くこすった瞬間。

南条「んっ!!」

さつき乳首で感じたのと同じ、甘い電流が走るのを感じた。

南条(そういえば、雑誌にもあったような…)

ぼやけた思考で思い返しながらか、指を割れ目に擦り付ける。一撫でする度に体が浮くような気持ちよさを感じ、徐々に指を動かす速度が速まる。クチュ、クチ、と狭い空間に響く音が耳から頭を刺激する。

南条(そうだ…指、いれるんだっけ…)

雑誌の内容を思い出し、パンツをゆつくりと脱ぐ。股の割れ目とパンツの間に数本、透明な糸が伸びている。それに構わずパンツを放り出し、股の割れ目の中に

指をゆつくりといれる。

南条(ふううっ♡)

たつたそれだけで、意識が飛びそうなほどに全身が痺れる。粘ついた液はひんやりとしているのに、体は燃えるように熱くて。液で粘ついた指を奥にいれていくと、お腹の中をかき回されるような、体をかき乱されるような切なさ襲われる。

南条(あっ、これ、いい、きもち、いい♡)

もはやまともに物事を考えることすらできず。アタシはただ、より気持ちよくなれるところを求めて指を動かす。

南条(もつと、もつとほしいっ♡)

右手でひたすら胸を揉みしだき、左の指を割れ目に突き刺し、まさぐるように前後させる。指はねじるように、ほじくるように体の奥へと進んでいき、第二関節まで割れ目の中に埋まる。そして指がある部分を捉えた瞬間――

南条「あっ、ひっいんんっ!!」

今日一番の快楽に脳みそがスパークし、目の前が真っ白に染まる。あまりの衝撃に声を殺すことも忘れ、アタシはただ腰をガクガクと震わせながら余韻に浸ることしかできなかった。

：それから5分経ったか、あるいは10分か。

南条「あー…はあ…」

快感の余韻に浸るアタシは時間経つにつれ、徐々に今の自分の姿を客観的に認識できるようになってきた。

便座に腰かけ、タンクにぐつたりともたれかかり、だらしなく股を広げ、息を荒げ、左手と股はグチョグチョに濡れている。もし目の前に鏡があったら、はしたなく歪んだ顔が映っているであろうことは簡単に想像できる。こんな姿、もし誰かに見られてしまったら――

南条(っ、何、してるんだアタシ…)

冷静さを取り戻した頭に浮かんできたのは得体の知れない恐怖。まるで自分が自分でなくなるような、自分の中の知らない自分が浮かんでくるような体験に寒気を感じていた。

南条(…うん、こんなことはこれっきりにしよう)

辛い、体の中に渦巻いていたモヤモヤはすっかり消え

去っていた。これなら、もうこんなことをする必要はないだろう。そんな根拠のない考えに胸を撫で下ろしつつ、アタシは手と股を刺激しないように拭き、着替えて寝ることにした。

結論から言えば、その考えは大外れだった。

確かに自慰をした直後はモヤモヤもなくなり、体も楽になった。だがそれから一日、また一日と経つたびに自分の中にモヤモヤが蘇ってくるのだ。

しかも今度はそれだけではない。トイレに入るたびに自慰をした時のことが頭によぎり、アタシの中のモヤモヤをこれでもかとばかりに加速させる。

また、あの感覚が味わえたなら。

南条(ダメだ、こんな事考えちゃ…)
いやらしい事に支配されそうになる頭を振り、必死に追い出そうとする。何かに打ち込めば忘れられるかもしれない、そう考えてレッスン後も一人で居残り練習を続けて。

それでも、体の中に感じるモヤモヤを取り除くことはできなかった。

そんなことを繰り返すこと、数日。

南条(ワンツ、スリーフォー…)

その日、アタシはダンスレッスンを終えた後も居残り練習を続けていた。目的はもちろん、…まあ難易度の高いダンスをできるようにしたいというのもあるが、体の中のモヤモヤを振り払うためだ。

南条(ダメだ、もう一回)

ステップがどうしてもふらついてしまう自分に憤りを覚えつつ、もう一度頭からやるためにプレーヤーに手を伸ばすが、

ルーキートレーナー「光ちゃん？そろそろ片付けなさい！」

南条「えっ？…うわっ、もうこんな時間！ごめんなさい！」

ルーキートレーナーさんの言葉につられて時計を見れば、レッスンスルームの利用時間をオーバーしてしまっていた。慌てて片付けを始めるアタシに、ルーキートレーナーさんが心配そうに話しかけてくる。

ルーキートレーナー「どうしたの？ここ何日か、ずっと居残り練習を続けてるって聞いたけど…」

南条「えっと、それは……」

言えるわけがない。自分の中のモヤモヤを、自慰以外の方法で振り払おうとしてるなんて。

ルーキートレーナー「頑張ってるのはとても偉い事だけど、あんまり無理しちゃダメだよ？」

南条「……はい」

ルーキートレーナー「大丈夫、これだけ頑張れば次は光ちゃんもステージに立てるよ！」

南条「っ！」

ルーキートレーナー「……光ちゃん？」

南条「ううん、何でもありません。ありがとうございます！」

動揺を悟られるのが怖くて。アタシは逃げるようにレッスルームを後にした。

誰もいないロッカールームで、汗だくのレッスンウェアを脱ぐ。反芻するのは、ルーキートレーナーさんの言葉。

「頑張ってるのはとても偉い事」

「次は光ちゃんもステージに」

南条「はあ……」

真剣に応援をしてくれる人に対して嘘をついているという罪悪感に、思わずため息が漏れる。そう、アタシが頑張っているのはステージに立つためじゃなく、自分の中のモヤモヤを振り払うためなのだから。

南条（今日もダメ、か）

ダンスレッスンをあれだけやっても、やはりモヤモヤが消える気配はない。解決策の見当たらない不安にもう一つため息が漏れ出て

「……？」

「光ちゃん！特訓お疲れさまー！」

突如、後ろから胸を掴まれる感触に襲われる。こんなことをする人間はアタシの知る限りただ一人。

南条「あ、愛海！」

愛海「うひひ、せいかりい！」

楽しそうに返事をしながら、アタシの胸を揉むことはやめようとしなさい。

南条「んっ、ちょ、やめ……」

愛海「ここ最近ずっと居残り頑張ってるって聞いたからね、あたしが疲れをほぐしてしんぜよう」

愛海の白々しい言い訳を聞く余裕は、今のアタシにはない。

南条（あつ、そんなと……）

蘇る自慰の感覚。今までくすぐったいだけだった愛海の指さばきが、アタシの中に押し込められたモヤモヤを暴れさせる。振りほどきたいのに、体が言うことを聞いてくれない。こんな事を考えちゃいけないのに、痺れるような感覚を抑えきれない。頭にチリチリとした感触が生まれる。足から徐々に力が抜け、自分を支えられなくなる。

南条「ふうっ、あ……」

思わず漏らしてしまった声が、愛海に届かないわけもなく。

愛海「……え、何この反応。光ちゃんもしかして……」

南条（バレル……）

終わってしまった。何かはわからないが、その何かが終わる予感に思わず目を瞑り、

「……？」

「あら愛海ちゃん、随分と楽しそうね？」

愛海「ゲッ、その声は……」

振り向けば、愛海の後ろに笑顔で仁王立つ清良さんがいた。

愛海「き、清良さん？なんでここに……」

清良「事務所から急にいなくなるんだもの、心配したのよ？その時光ちゃんが最近居残りしてる事を思い出したから、まさかと思っかけてみたんだけど」

そこで一度言葉を切ると、清良さんの笑顔に凄みが増した。

清良「ドンピシャだったみたいね？」

手袋を直すような仕草を見せる清良さん。体を密着させているせいで、愛海が震えているのが背中を通して伝わってくる。

愛海「待って、清良さん、これには訳があつて」

清良「言い訳無用。さ、あっちへ行きましょうか？」

ゆっくりと近づいてくる清良さんに愛海は顔を青ざめさせるが、突如何かをひらめいたかのように口を開いた。

愛海「そっ、そうだ！清良さん、光ちゃんちょっと体調が悪いみたいなの！」

南条「えっ……」

清良「えっ……？」

一瞬、清良さんから出ていた怒りのオーラが薄れる。その瞬間を愛海が見逃すはずもなく。

愛海「隙あり！」

南条「うわあっ！」

素早くアタシの隣をすり抜けて逃げ出してしまふ。急に支えを失くしたアタシは足をもつれさせ、間一髪で清良さんに受け止められる。

清良「光ちゃん！」

愛海「あつそうだ、光ちゃん。本当に調子が悪いなら、無理せず清良さんに診てもらった方がいいよ。じゃあね」

「……」

言うだけ言って、愛海は走り去ってしまった。清良さんも追いかけたそうにしてるが、アタシを心配してか愛海の逃げた方とアタシの顔を交互に見比べるだけでこの場を離れない。

南条「き、清良さん。アタシは大丈夫だから」

清良「でも」

南条「ホントに大丈夫。ちょっと張り切りすぎて疲れちゃっただけだから」

清良「そうなの？……でも、もし何かあったら、必ず私や周りの大人に相談するのよ？」

南条「ああ！心配してくれてありがとう、清良さん！」

清良「じゃあ、私はこれで。こらっつ、愛海ちゃん待ちなさい！」

「……」

そう叫んで清良さんは愛海の後を追いかけて走り去る。やっぱり清良さんは怖いけど優しい人だと思い、同時にそんな人に嘘をついた自分が情けなくなる。ああは言ったけれども、本当は全然大丈夫じゃない。何故なら、

南条「っ、うう……」

愛海に揉まれて加速したモヤモヤが、止めどなくアタシの中に渦を巻き続けているからだ。

寮に帰ったアタシは、自室に入るとすぐにベッドに飛び込んだ。

南条「すう……ふう……」

顔を枕に強く押し付けて目を閉じ、深く息を吸い、吐く。今まではこうすることで、アタシの中のモヤモヤをちよつとでも静めることができたのだ。だが、今は

南条（っダメ、だ……）

「……」

「……」

「……」

「……」

「……」

フラッシュバックする愛海の手の感触。胸を揉まれた時のあの切ない感覚がかえって明確に思い浮かんでしまふ。忘れよう、忘れようという思いが逆に頭に刷り込ませていく泥沼に、体の中のモヤモヤが爆発しそうなほど膨れ上がったいき、

南条(…愛海の、せいだ)

南条(そうだ、愛海のせいであんなにちゃったんだ。

だから、一回だけ…)

アタシは愛海に責任を押し付け、自慰をすることの罪悪感から目を背けた。

枕を放り出すと仰向けになり、シャツを捲り上げるように脱ぎ、ブラも外して胸を露出させる。愛海に揉まれた影響か、乳首はすでにぶっくりと膨らんでいた。また気持ちよくなれるという期待から、心臓の鼓動が速まったように感じる。アタシはゆっくりと両手を胸に当て、そのままこねる様に動かし始めた。

南条(あつ、これえ…♡)

体の中のモヤモヤが増したせいとか、愛海に弄られていたせいとか。前に自慰をした時よりも早く、ビリビリと電流が走り始め、頭の中に焼けるような感触が生まれる。さらなる快感を求め、アタシは乳首を指でつまんでこねくり回す。

南条(はあつ、いい、気持ちいい…♡)

左の指は乳首を弄り、右は手のひら全体で胸をまさぐる。こり、こり、と軽くなじむようにしただけで乳首から電流が流れた。あつという間に頭のでっぺんから足の指先までとろけるような気持ちよさに包まれ、思考が霧散していくのを感じる。

南条(もつと、もつとお…♡)

気付けば無意識のうちに右手がベルトを外し、ズボンとパンツを下ろしていた。そのまま右手は股にあてがわれ、指が割れ目を擦りあげる。

南条(んっ、くうっ♡)

脳みそを襲う切ない感覚。あつという間に割れ目から汁が滲み出し、指を汚して動きをなめらかにしていく。同時に快感の波が押し寄せ、擦り付ける指を加速させる。

南条(もう、いい、かな)

だいぶ指と股が濡れたところで動きを止め、割れ目に

ゆっくりと指をいれる。滑るように指が体の中に誘われ、甘い電流が脳を引っ掻き回す。

南条(はあ…♡)

ねじめるように、ほじくるように。より大きな快感を求め、指の動きが徐々に大きく、速くなっていく。じゅぼ、じゅぼ、とはしたくない音を立て、何度も指が割れ目の中を往復する。そして、

南条(あつ、くる、きちゃうううっ♡)

トイレでした時と同じように。一際大きな電流に体を貫かれ、目の前が白く染まると同時に体が跳ねた。だが、前回自慰をした時とは違う。

南条(…まだ、モヤモヤする…)

一回快感が頂点に達しただけでは、体の中のモヤモヤを振り払えずにいた。しかしほやけた思考では具体的にどうすればいいかまではわからない。もう一度同じことをすればいいのだろうか？

そう思いつつ何気なく横を向いた目にあるものが映る。

南条(あれは…)

捉えたのはおもちゃ箱の中にある、特撮番組でヒーローが使っている武器。怪獣の尻尾をモチーフにしていて、劇中では鞭や剣として使われていたものだ。それを見たアタシの中に、とんでもない考えが頭をもたげ

る。

南条(…もし、アレをいれたら…)

おもちゃの武器を、指の代わりに割れ目にいれる。普段なら絶対に考えもしないようなことを、しかし快楽に溺れた今のアタシは思いついてしまう。指よりも太く、樹脂により作られたゴツゴツした表面

指をいれただけでもあれだけ気持ちよかったのなら。

これを使ったらどうなってしまうのだろう。

興味を、快楽を求める思考が、アタシの体を突き動かす。

南条(…そう、モヤモヤを追い出すために、力を借り

るだけだから…)

情けなく言い訳を心の中で繰り返す、おもちゃを手に取る。柄にあたる部分を掴み、刀身が自分に向くよう逆手で持つ。

南条「ふうー…ふうー…」

割れ目に先端が当たる。緊張感から、あるいは高揚感から息が荒くなる。

意を決して、僅かに先端を割れ目にいれた瞬間。

南条「あひいっ!？」

指の時とは比べ物にならない快感が襲い掛かってきた。

指はただ割れ目の中に潜り込むだけだった。だが、

南条(ひいっ♡)こりこりこりこり♡こすれてるう♡)

このおもちゃは割れ目をかき分け、こじ開けるように入り込んでくる。必然的に肉体とおもちゃが強く擦れ合い、ゴツゴツした表面が中を強く荒らすのだ。

南条(すごっ♡これえっ♡すごいっ♡きもちいいよ

おっ♡)

ずぶずぶとおもちゃが体の中に埋まっていく。次から次に溢れる液が表面を濡らし、動きを滑らかにさせ速度が上がる。

南条(とまらないっ♡とめられないよおっ♡)

爆発的な快感の波にあつという間に思考が壊れ、ただ気持ちよくなることだけを求めて体が動く。おもちゃを動かしているのか、それとも腰が動いているのか、それすらもわからないほどに脳がとろけてしまっていた。

南条「あつ♡あふっ♡んっ♡んうっ♡」

もはや声すら抑えられない。気付けば、空いた左手はいつの間にか再び胸をいじくりまわしている。股からくる刺激、胸からくる刺激、そして耳からくる音の刺激。

南条(あつ、またくる♡さつきよりすごいのおっ♡)

アタシが再び達するまでに、そう時間はかからなかった。

南条(…)

指を使った時よりも圧倒的に大きな衝撃が全身を襲う。腰がピンと持ち上がり、ぶしゃあ、と股から液体の漏れる感覚がしたが、快楽に飲まれたアタシにとって

はもはやどうでもいいことだった。

南条(すごい…♡指の時より、ずっと気持ちよかった

…♡)

名残惜しく思いつつ、おもちゃをゆっくりと引き抜く。体の中のモヤモヤを消し去ってなお収まらない快感の波に、アタシの理性は完膚なきまでに破壊されてい

態なんです！って！

南条「そんなこと、言えるわけ」

麗奈「事実を言うのになんで躊躇う必要があるわけ？
アンタが自慢のおもちゃを使ってやらしい事してたの
は本当じゃない」

南条「それは……」

麗奈「そんな事する奴が変態でなきゃなんだっていう
のよ。いい加減認めたら？アンタはもうヒーローでも
アイドルでもない、ただの変態中学生なんだってこと
を」

南条「！」

ヒーローでも、アイドルでもない。決定的な言葉を突
き付けられ、倒れこむように背中を壁にぶつける。

南条「そんな……アタシは……」

莉嘉「だってそーでしょ？嘘つきのヒーローなんてサ
イテーだし、ファンを幻滅させるなんてアイドルとし
てありえないもん」

愛海「ホント、やらしいことして気持ちよくなるなん
て、ヒーローとしてもアイドルとしても失格だよ」

南条「あ、ああ……」

皆の言うことは正論で、事実で。言い返そうとする度
に、アタシの中の何かが崩れていく。

プレッシャーに耐えきれず、アタシはその場にへたり
込むと耳を抑えて体を丸める。

麗奈「はん、言い返せないから耳を貸さないってワケ
？ただの変態じゃなくて、卑怯者の変態ね」

莉嘉「嘘つきー、ヘンターイ！」

愛海「卑怯者ー！」

南条「うわああああああああああああああああああ
あああああああーっ！！！！！！」

手をすり抜けるかのように響く三人の声がアタシの心
を苛む。

嘘つき。変態。ヒーロー失格。アイドルなんかじゃな
い。

でも、それらは全部本当のこと。ただ、アタシが認め
られないだけのこと。

自分の招いた非情な事実を突き付けられたアタシは、
それでも……

南条（……助けて……）
往生際の悪いことに、そんな資格もないのに。

南条（助けて、Pさん……）
ひたすらに、助けを求めていた。

南条「助け……P、さ……」

？「おい光、しっかりしろ！おい！」

南条「え……」
お腹の底に響く声。肩を強く揺らされる衝撃に意識が
震え、ゆっくりと目が開く。そこにいたのは。

南条「P……さん……？」

P「良かった、目が覚めたか！」
紛れもなく、間違いなく。アタシの自慢の相棒で、ア
タシにとつてのヒーローのPさんだった。

南条「ゆ……夢……？」
P「大丈夫か、ひどくうなされてたんだぞ？熱は……な
いみたいだな、どこか痛む所はないか？」

南条「……P、さ……」
本当に助けに来てくれたと安堵するのも束の間。夢の
中の言葉が再び頭に渦巻き、心を蝕む。

南条「うう、うあ……」
P「光？どうした、何があつたんだ？」

南条「ごめん……なさい……、ごめん……なさい……」
アタシは泣きじゃくりながら、ただひたすら謝罪の言
葉を繰り返す。

P「大丈夫、俺はちゃんと聞いてやるから。落ち着い
て、ゆっくり話せ。な？」

P「さんが優しくなだめてくれる。でも、今のアタシに
は優しくしてもらう資格なんて無い。

何故なら……」
南条「アタシ……アタシ、ヒーローアイドル失格なんだ
っ……」

そしてアタシは、勢いのままに全てを打ち明けた。
雑誌の内容に興味をそそられて自慰をしたこと。二度
としないと決めたのに、他人のせいにしてそれを破つ
たこと。自慰をするのに、おもちゃを使ったこと。自
慰をした後、とてつもない罪悪感に襲われたこと。夢
の中で、事務所の方々に責められたこと。

P「Pさんは最初の方は驚いていたけれど、何も言わずに
全部を聞いてくれて。」

南条「それで……アタシ……」

P「目が覚めたらこうなってた、と。大体分かった」

全てを話し終わってから猛烈な後悔に襲われる。今
の話を知って、アタシがどうしようもない変態なんだ
って事を知って、Pさんが幻滅しないはずがない。

P「光……」
南条「っ……」

きつとPさんに嫌われてしまったに違いない。告げら
れる言葉が怖くて、身をすくめて目を瞑るアタシにP
さんは

P「……辛かったな」
そつと、アタシの頭を撫でてくれた。

南条「……え……？」
P「誰にも言えないで、ずっと悩んでたんだよな。……
ごめん、傍にいてやる事が出来なくて」

告げられたのは、予想と違って優しい言葉。
南条「な、んで……」

P「ん……？」
南条「アタシの事、嫌ったりしないのか？だってアタ
シ、いやらしい事して喜んでる、ヒーローとしてもア
イドルとしても失格の……」

P「馬鹿言え」
南条「な……」

P「そんな事……って言ったらアレか、お前にとつちや
大事だもん。でも、それでお前がヒーローを、アイ
ドルを辞めなきゃいけないなんて、そんなわけあるは
ずがない」

南条「……本当か？」
P「もちろん」

南条「……アタシ、ヒーローを、アイドルを好きなまま
でいいんだな？」

P「ああ、いいんだ」
南条「……そっか……そうなのか。よかつ、あつ、う、う
あああああ……」

P「うわ……」
夢を諦めなくていいと言われて。自分のことを許して
貰えた気がして。何より、アタシの事を嫌いにならな
いでくれて。色々な事への安心から、アタシはPさん
に抱きついて、ひとしきり泣いた。その間Pさんは何
も言わず、優しくアタシの頭を撫でてくれた。

それから、数十分が経って。
Pさんがアタシの悩みについて力になってくれる人を

呼んでくるといふことで部屋を離れていた。勿論、悩みを相談するからにはその人に同じことを話さなきゃいけない、とPさんには気を使って貰った。でも、アタシはもう他の人に話すことを恐れていなかった。Pさんが絶対に味方でいてくれるってことが、アタシに勇気を与えてくれたからだ。

P「入るぞ」

南条「ああ！」

「お邪魔します。おはよう、光ちゃん」

南条「：お、おはようございます、清良さん」

Pさんが連れてきたのは清良さん。確かに、元看護師の清良さんならこの手の悩みについては詳しいかもしれない。：昨日嘘をついた事は、ちよっと後ろめたいけど。

清良「それで、Pさん。光ちゃんの事なんですけど、やっぱり、どこが悪いんですか？」

P「それなんですけど：光、自分から話せるか？もし辛いなら、代わりに俺が：」

南条「大丈夫。自分で話すよ」

嘘をついてしまったからこそ。清良さんには、自分の口で伝えなきゃいけない。アタシは包み隠さず、同じ説明を清良さんにする。

清良「そう：そういうことだったの」

南条「昨日は、その、嘘をついたりしてごめんなさい！」

清良「それは仕方ないわ、事情が事情だもの。大っぴらに人に話せる事でもないしね」

勿論、嘘は良くないけど、と付け加え、清良さんは話を進める。

清良「まず光ちゃんの誤解を解くところから始めましょう。自慰というのは、決して悪い事ではないのよ？」

南条「えっ、そうなんですか？」

いきなり前提が否定されて、つい間の抜けた反応をしてしまう。

清良「性に関わることだから、無闇に話題にあげるのはダメだけど。成長過程において、自慰は大切な役割を果たすのよ」

南条「大切な役割？」

清良「今、光ちゃんの体は大人になろうとしているの

例えば、筋肉のつき方だったり、骨の太さだったり。あと、女性らしい丸みのある体型に変化したりね。こゝまでは分かる？」

南条「：はい、何とか」

うん、確か学校の授業で習ったような気が：しないでもない。多分。

清良「でも、こういういった変化は体や心に大きなストレスをかけるものなの。そのストレスを溜め込んでしま

うと、成長に悪影響を与えてしまう。だから、ストレスを定期的に発散させる必要があって、その手段の一つが」

南条「自慰：」

清良「勿論、やりすぎは体に悪いけれどね。だから、自慰をすることはそんなに恥ずかしい事じゃないし、まして自分を変態だ、なんて責める必要はないのよ？」

南条「そう、だったんだ」

清良「ただ、おもちゃを使った自慰。それはやめた方がいいわ」

南条「っ！」

ほっとした矢先に厳しい事実を突き付けられ、思わず息が詰まる。

清良「あつ、勘違いしないでね。道具を使った自慰自体は変な事じゃないのよ？指や手だけではうまく快感を得られない場合に使う、なんてことも少なくないわ

南条「なら：」

清良「さつきも言った通り、自慰はストレス発散のためにはやる事。でも、光ちゃんはおもちゃを使って自慰をしたことに罪悪感を覚えてしまった。それこそ、夢の中で自分を責めてしまうほどに。これじゃ、かえってストレスを溜めてしまうわ」

南条「あつ、そっか：」

清良「だから、光ちゃんにその方法はオススメできないわ。何より、光ちゃん自身が嫌なことを無理にする必要はないんだからね？」

南条「はい、ありがとうございます！」

P「ん、どうやら解決したっぽいな。流石清良さん、頼んで正解でしたよ」

清良「うふふ、どういたしまして。光ちゃんも良いプ

ロデューサーさんに巡り合えて幸せね？」

P「ちよっ、清良さん」

イタズラっぽく微笑む清良さんは、Pさんの制止を無視して話を続ける。

清良「実は昨日の夜、Pさんに光ちゃんの事を連絡したの。そうしたらPさん、ライブの後処理とかを放り出してこっちに帰ってきてくれたの？」

南条「えっ、そうだったのか！？」

清良「さつきもそう。光ちゃんの問題を解決するには男の自分じゃ力不足だからって、すごい勢いで頭を下げてきたからびっくりしちゃったわ」

P「清良さん、それは内緒にしておいて下さいよ」

照れくさそうに頭を掻きながらやんわりと抗議するPさん。離れた所にもアタシの事を考えていてくれていた事が嬉しくて、心の中が温かくなるのを感じた

南条「そんなことがあったのか：。二人とも、心配かけてごめんなさい」

清良「いいのよ、困った時は助け合いだもの。また何かあったら、遠慮なく相談してね？」

P「：ま、後処理はひと段落したところだったしな。それに俺はお前の担当で、相棒だからな。支えてやるのは当たり前だろ？」

南条「：うん！本当に、本当にありがとう！」

こうして、アタシとアタシの体に起こった事件はひっそりと幕を閉じた。事務所の皆様にはレッスンを急に休んで心配をかけちゃったし、麗奈とルーキートレーナーさんには凄く怒られちゃったけど。

今ではもう、モヤモヤに惑うこともない。最高のヒーローを、最高のアイドルを目指して、また頑張っていくぜ！

：でも。

南条「んあっ♡はっ♡はあっ：♡」

夜にひっそりと、自分の中のモヤモヤを鎮めてる時。

南条「あっ♡んっ♡んっ♡んっ♡んっ♡」

この時だけは、ヒーローでもない、アイドルでもない。ただの、一人の女の子になっても、いいよね？

Hの素顔—そしてアイドルはいなくなる—了

HEROS

発行日
2017/3/12

印刷
ねこのしっぽ

表紙・裏表紙デザイン：たかにそ

南条光R18合同制作委員会
takaniso@outlook.com

事務所Hの世界



ペッターP

色情魔の世界



うすら氷

触手の世界



如月樹

加比・スィガーの世界



桃桃白

SEX中毒の世界



もとがし

熟睡の世界



へたを

生える世界



有川古葉

妊娠確実の世界



じゅじゅまる

妊娠完了の世界



シャサスロウ

悪堕ちの世界



トキロン

秘密レッスンの世界



松之神

くすぐりの世界



くまんぬ

幼馴染の世界



orih

南条くんの世界



やのかけ

デリヘルの世界



ででぴん

ヒカル缶詰の世界



屋良斗

お嬢めしの世界



めたれこ

最強ヒーローの世界



ウサ野タリ子

巨根の世界



おじいちゃん

女豹の世界



ゆであずき

敗北ルートの世界



taku629

二チアサ愛撫の世界



解凍

性器再現の世界



Kの特急

援助交際の世界



央

独占欲の世界



ひびき

策謀の世界



田宇マグろ!

レイプ堕ちの世界



雑魚P

麗奈二一の世界



卯月由羽

初体験の世界



モンドP

ヒーローアイドル
南条光
幾つもの世界を巡り
その瞳は何を見る...